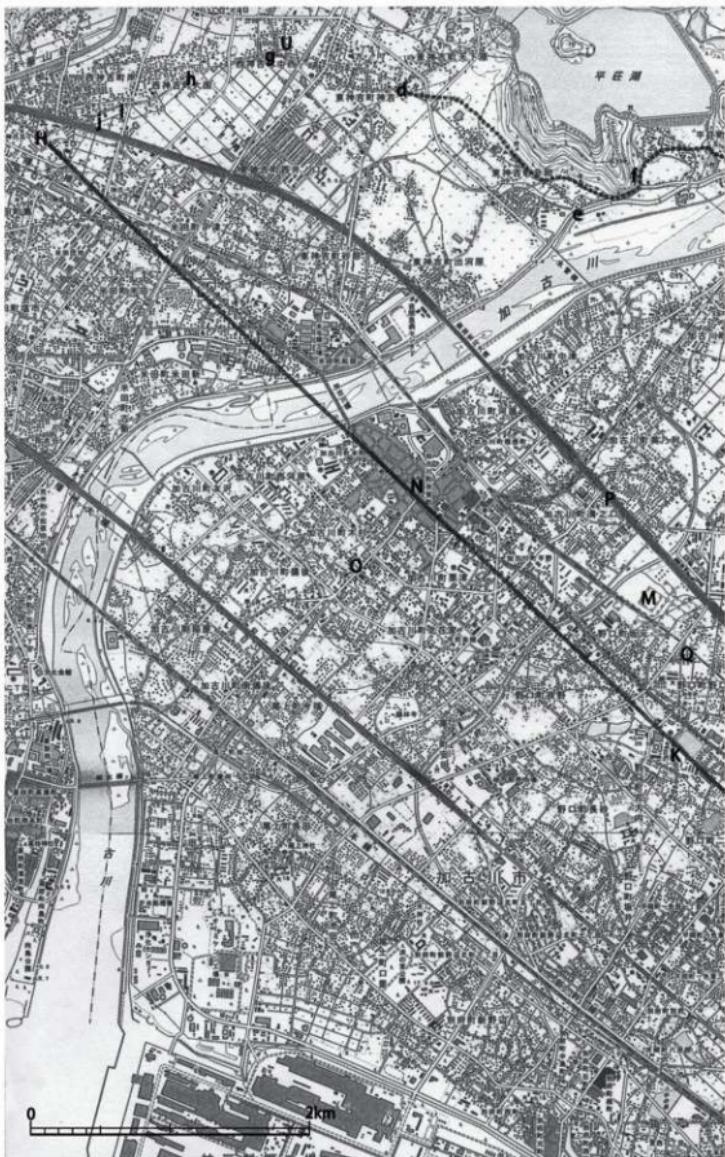




第22図 賀古・印南郡付近の古代官道（1）（1/2.5万地形図「東二見」「三木」「加古川」「高砂」を縮小）



第23図 賀古・印南郡付近の古代官道 (2) (1/2.5万地形図「東二見」「三木」「加古川」「高砂」を縮小)



第24図 賀古・印南都付近の古代官道（3）（1/2.5万地形図「加古川」「高砂」を縮小）

吉本は、他の地域においても、方3町程度の方格地割を手がかりにして、郡家を想定しているが、その後の全国的な郡家の発掘調査によれば、そのような形態をとる郡家は見つかっておらず、その手法自体に疑問が持たれる。確かに当地付近に郡家を考えれば、想定駅路にも近く、7世紀末の創建とされる野口庵寺⁽²¹⁾を郡寺と見なせば、この付近は、郡家の有力な候補地と言えるであろう。しかし、賀古郡における古代寺院は、野口庵寺のみではなく、現在のところ、加古川市神野町西条の西条庵寺⁽²²⁾（第23図R）と同町石守の石守庵寺⁽²³⁾（S）が知られているので、そちらについても検討すべきである。両寺院とも7世紀末の創建とされるが、距離的には約1.5kmしか離れていない。付近には、賀古郡の唯一の式内社である日岡坐天伊佐々比古神社に比定される日岡神社（T）も存在し、この地域が古代の賀古郡における重要な地域であったことは間違いないであろう。そして、西谷眞治は、西条庵寺の近くに西条古墳群、石守庵寺の近くに日岡山古墳群のようなこの地域を代表する群集墳が存在することなどから、古墳の造営者と寺院の建立者との間には連続性があったのではないかとしている。すなわち、両寺院周辺は、大化前代からの地域中心地であったと言えよう。このように見てみると、賀古郡家については、その位置を特定できないが、日岡山周辺に存在した可能性もあるのではないだろうか。なお、日岡山の南南西約15kmの美乃利遺跡では、「郡」と記された墨書き土器が出土している。

最後に印南郡家について、今里幾次は、「播磨國風土記」に見える大国里の故地に、印南郡司が開与した寺院と推定される中西庵寺（第24図U）が存在することなどから、大国里に郡家が置かれたと考えている。大国里の範囲については、西本が加古川市西神吉町の南部と高砂市阿弥陀町の東部を合わせた⁽²⁴⁾地域に比定している。それに対して、吉本は「播磨國風土記」の益氣里の項に、その地名の起源を御宅からきていると記していることから、これを「益氣御宅」と称して加古川市平荘町に比定し、同町の西山の段丘上に認められる方格地割を、郡家に想定した。長山泰孝は、益氣御宅の存在自体が信憑性が薄く、平荘町では北に偏しすぎるとして、駅路により近く、旧河道にも接近している大国付近に郡家を想定した。吉本は一方で、高砂市の天川の左岸に、N43度Eの方位をとる周辺の条里とは異なる、N5度Eの小条里区⁽²⁵⁾が存在し、その範囲に含まれる高砂市曾根町の塩田遺跡⁽²⁶⁾、「三宅」「大使」と書かれた墨書き土器や、「伊保田司」と箋書きされた円面硯⁽²⁷⁾が出土したこと、遺跡に接して「ウシカイ」の俗称地名があることから、この地を、「日本書紀」安閑天皇2年（535）5月条に見える牛鹿屯倉⁽²⁸⁾に比定していた。その後、吉本は、近世の「曾根村字別地図」に「香利屋」の地名があることを、今井聰の教示によって知り、平荘町説を撤回してこの地に印南郡家を求めた。西本は、塩田遺跡について、新潟県長岡市の八幡林遺跡と比較するなど詳しく検討し、周辺に印南郡家が存在した可能性は高いとしている。ただし西本は、吉本説では牛鹿屯倉の地に印南郡家が置かれたことになるが、「三宅」「大使」と書かれた墨書き土器や「伊保田司」と箋書きされた円面硯は、いずれも奈良時代後半から平安時代初期のもので、6世紀にこの地に屯倉が存在した根拠とならないので、牛鹿屯倉は飾磨郡内に求めるべきとしている。そして、「日本書紀」天武天皇14年（685）11月条に見える「郡家」は、古訓では「コホリノミヤケ」と読まれることなどから、塩田遺跡で出土した墨書き土器の「三宅」は、印南郡家を指すとしている。

確かに考古学的な遺物を伴うという点で、塩田遺跡は、印南郡家の有力な候補地として注目されるが、以下のような問題点も存在する。1つは、現在のところ、塩田遺跡で出土した郡家に関連する可能性がある遺物は、奈良時代後半から平安時代前期のもので、それ以前にさかのほる遺物が確認されていないことである。また、やはり現時点では、遺構がまったく検出されていない。さらに、印南郡の郡寺は、中西庵寺⁽²⁹⁾と考えられるが、中西庵寺と塩田遺跡は、直線距離でも、約5kmほど離れる。山中敏史は、從

来「郡寺」等と呼ばれてきた寺院を「郡衙周辺寺院」と称し、郡衙からの距離を基本的に2km程度以内と定義している。筆者は、やはり郡寺の名称を用いるが、郡家と郡寺との距離は、2km以内におさまるものが圧倒的に多いようである。そのあたりを重視して、筆者は、印南郡家についてその場所を特定することはできないが、中西庵寺付近に存在したと考えたい。同寺院は、「和名抄」の大國郷に存在したと見なされるが、「播磨国風土記」印南郡条には、「大國里」の地名の由来について、百姓の家の多くがここにあるからとしている。この記事からも、印南郡において、大國里（郷）に人口が集中していることがうかがえる。また、いつ形成されたかは不明であるが、中西庵寺の前面には、駅路を基準線とする印南郡最大の条里地割が展開していた。ただし、中西庵寺は駅路に沿わず、郡家をその周辺に考えると、郡家も駅路に沿っていなかったことになる。塙田遺跡は駅路にほぼ沿っているので、あるいは奈良時代後半に、大國郷から郡家が移転してきた可能性はある。

以上、各郡家の位置について考察した。そのうち、遺跡として明確なのは、吉田南遺跡に比定される明石郡家のみで、特に賀古郡家については、駅路に近い場所に考える説が一般的であるのに対し、日岡山周辺に想定してみた。ただし、賀古郡家が駅路沿いにあったとしても、明石・印南両郡家が駅路から外れていれば、それらを結ぶ伝路は、駅路とは別路になるはずである。その場合従来の駅路は、駅路と伝路とを兼ねた駅伝路となるであろう。それでは、以下、伝路の復原に入りたい。

4. 伝路の復原

明石郡家に比定される吉田南遺跡（第21図C）から、駅路の北約750メートルに平行する現在道（C-V）があり、筆者はこの道を伝路を踏襲した道と見なしたい。V点からは、方位を北西に変え、さらにW点で微妙に屈曲してX点に達する。この区間は、駅路と約500m離れて平行する。また、このW-X道をそのまま延長すると、Y点の標高80.1mの三角点付近に達するので、この丘の頂上がX-Y道設定の目標物になった可能性がある。X点から現在道は、やや北寄りにカーブを描いてZ点に達し（一部現在道は消滅）、a点まで直線的に進む。ただし、その間のb-cの現在道は北寄りに屈曲しているが、難波池（d）やその東南の池を、伝路の跡が溜池化したものと見れば、本来はZ-a間は直線的に通っていた可能性もある。なお、Z-a道は、駅路の北に約750メートル離れて平行する。ちなみに、想定伝路に沿うeは「大道池」と称し、池の西に明石市大久保町松陰の小字地名として「大道」地名も存在するので、この道路は「大道」と呼ばれていたのである。また、大久保町大崖の東川にかかる橋（f）を「上大道橋」と称する。さて、想定伝路は、g点付近から前方の丘陵を避けて、カーブを描き始めるが、h点までの道路は、工場の敷地等となって残っていない。途中3ヶ所で溜池の堤防を兼ねていたが、現在は消滅している。これらは、低湿地を横切る伝路が土堤状の構造をしていたので、のちにそれらを利用して溜池を造る際に堤防としたのである。i-j間では、丘陵の裾を周るような形状を取り、宗賢神社（k）、黒石大明神（l）が存して、「山の辺の道」的な形状を示している。これらの神社の創始は不明であるが、黒石大明神は、文字通り黒い石を御神体としており、背後には横穴式石室をもつ古墳も存在したので、古代までさかのほる可能性もある。

さて、想定伝路は、j点で駅路と合流するが、そこには「左太山寺道」と記された近世の道標があり、これまで述べてきた想定伝路が、後の神戸市西区伊川谷町前間にある太山寺への参詣路でもあったことがうかがえる。ここから、しばらく駅路と伝路は同じ道となり、仮称邑美駅に比定される長坂寺遺跡（G）に達する。

⁽²²⁾ 第22図m点からは、吉本が山陽道のバイパスとした道路が駅路から分岐するが、先述したように、筆者はこの道路を伝路と見なす。したがって、以下の記述は、吉本の復原に多くを負っている。m-n間およびo-r間は、魚住町長坂寺と同清水との大字界となっており、p-q間は瀬戸川の堤防を兼ねている。q-r間とs-t間は、神戸市と明石市との境界線で、瀬戸川以北は古道の面影をよく残しているが、現在道は、土山ゴルフ場の敷地で切れる。しかし、かつてはu点まで直線道が続いており、それ以北はv点まで瀬戸川の堤防状の道となっている。第23図のw点には、x点の国安天満神社の鳥居が神社から約700m離れて、道路に面して立てられている。のことからも、想定伝路が古道であることがうかがえる。yは小字「大道」で、この道が大道と呼ばれていたことがわかる。また、z点には「道門」の小字地名が残る。A-BとC-Dでは、再び瀬戸川の堤防を兼ねる。E点からは、痕跡をたどることはできないが、その延長はF-G道に達し、G点で屈曲してV点まで延びる。その後は、現在直接痕跡をたどることはできないが、吉本によれば、第23図のW点で屈曲した後、日岡山とその東の山塊との間を通り抜け、「大野渡」と呼ばれるX点に達することである。なお、先述したようにS点が石守庵寺、R点が西条庵寺である。

ところで、『播磨國風土記』賀古郡条の鴨波里の項には、次のような記述がある。

此の里に舟引原あり。昔、神前の村に荒ぶる神ありて、毎に行く人の舟を半ば留めき。ここに、往来の舟、悉に印南の大津江に留まりて、川頭に上り、賀意理多の谷より引き出でて、赤石の郡の林の瀬に通はし出だしき。故、舟引原といふ。

すなわち、昔、神前の村に荒ぶる神がいて、往来の舟に対して交通妨害をしたので、それを避けるため印南の大津江から川上に登って、賀意理多の谷から赤石郡の林の港に迂回したという話である。石見完次は、稻美町六分一に「舟引」(第22図Y)の小字地名を見出し、往来の舟は大津江から加古川を遡って、その支流の曇川に入り、舟引原で舟を引いて分水嶺を越え、瀬戸川を下って再び海へ出て、林の港に出たと推測しており、吉本も同様の見解をしている。このルートの加古川・瀬戸川間は、まさにこれまで述べた伝路のルートにほぼ沿うものである。したがって、ここでは陸路と水路がセット関係になると見なせる。土着の神による交通妨害の説話は、『風土記』に散見されるが、中村太一は、こういった「荒神」現象は、列島社会の統合が進んで、共同体に交易の利をもたらせないまま通過するような中、長距離交通が行われた初期の段階で現れた矛盾に対するアクションであり、その時期について5世紀後半代以前と推測している。時期の問題については、まだ詰める必要があろうが、少なくとも大化前代まで遡ることは、『風土記』に記述が見られることからも確かであろう。また、一般的に伝路のルートは、大化前代の地域中心地を結んで形成されてきたと考えられるので、この場合もそれに当てはまるに

なる。

⁽²³⁾ なお吉本は、第23図のG点付近から東北方向に進み、90度西北に折れて、日岡山とその北側の山塊の間を抜ける幅約15mの余剰帯が検出されるとして、バイパスは後にこのルートに変更されたとするが、ここではかなり条里地割が乱れており、余剰帯の検出が疑問なことと、曇川を2度渡ることになることから、筆者はこのルート変更については疑問を感じる。

⁽²⁴⁾ 一方木下は、旧版地形図に、3ヶ所にわたって断続的に続く直線的な行政界に注目して、こちらを駅路のバイパスとしている。現在でもZ-a間がほぼ大字界となっており、特に、b-c間は、幅6~8メートルほどの土壌状を呈している。この想定によると、日岡山の西から加古川を渡ることになるが、対岸の想定伝路との接続を考えると、北に膨らむ吉本説よりも最短距離となる。吉本説の痕跡が不明瞭な

に対し、木下が指摘したZ-a間が明瞭であることを考えると、より最短距離になるように、伝路のルート変更が行われた可能性がある。

次に加古川以西については、第24図のH点で駅路と合流する段丘崖沿いの古道があり、吉本はこの道を駅路のバイパスに比定した。それ以前に鎌谷木三次は、この道を駅路と見なしていた。すなわち、駅路が直線的計画道であったことが知られていなかった時代には、このような自然発生的な古道が駅路と考えられていたのである。筆者は、このルートを伝路と考えたい。

吉本は山地の裾をめぐるようにして、d点に達する道路を駅路のバイパスとしているが、木下はe点付近に渡河するとしており、ここからd点までほぼ直線的な現在道があるので、やはり伝路の変遷があった可能性がある。なお、吉本の想定バイパスに沿うf点には、「播磨国風土記」印南郡条に見える「八十橋」⁽⁴⁵⁾の伝承地があり、付近には八十橋の小字地名が残る。また、加古川市東神吉町升田は、同じく「風土記」印南郡条に見える益氣里の伝承地で、「風土記」によれば、景行朝に屯倉が置かれたことによる地名とするが、先述したようにこの記事の信憑性を認めない見解もある。d点からはU点の中西庵寺まで段丘崖沿いに湾曲する道路と、段丘上のより直線的な道路が並行するが、ここでも前者から後者への変遷が予想される。空中写真の判読によれば、中西庵寺には、方約1町の地割が明瞭であるが、これの西側に接して東西約120m、南北約150mの方形地割も認めることができる。後者の南辻は段丘の下に張り出しが、これに沿って小道が通じており、g点には中西庵寺の露盤と刹を転用した「石井の清水」と称する湧水がある。それ以西の想定伝路は大國の地を経て、段丘下に沿って西へ向うが、吉本は南接して「大道」(h)「東大道下」(i)「西大道下」(j)の小字地名が存在することから、この古道は、「大道」と呼ばれていたとする。そして段丘の先端に近い、H点付近で伝路は、東南から直進してきた駅路と合流したと考えられる。

5. おわりに

以上で、伝路の復原を終えることにするが、最後にその意義や今後の問題点について述べておきたい。明石郡の駅路に沿って、「大道」の地名が分布していることは、すでに指摘されていたが、今回復原した伝路沿いにも「大道」地名が認められた。「大道」は、かなりありふれた地名で、地方の主要道路を指すと考えられ、時代的にも古代に限らず各時代に発生して使用されたのであろう。しかし、その中に古代の官道に由来するものもあることは、たとえば、「日本書紀」推古天皇21年(613)11月条に「難波より京に至る大道を置く」、白雉4年(653)6月条に「処處の大道を修治る」とあることからもうかがえる。明石郡の場合、先述したように駅路に沿って、明石市大道1丁目に「大道の上」の小字地名があり、長坂寺遺跡付近にも「大道池」や「大道」の小字地名がある。なお、天平3年(731)に、住吉大社が神祇官に提出した解文である『住吉大社神代記』には、神地となった魚次浜の北の四至を「大路」⁽⁴⁶⁾としている。また、阿閉津浜の北の四至に同様に「大路」が見える。これらの四至の比定を行った鎌谷⁽⁴⁷⁾や黒田義隆は、「大路」は山陽道駅路を指すとしており、したがって古代において、この地域の駅路は、「大道」もしくは「大路」と呼ばれていたことになる。一方、これも先に述べたように、想定伝路に沿って、明石市大久保町松陰に大道池と小字「大道」があり、また同様に加古川市西神吉町大國、同岸にも大道関係地名が分布しているので、いつの時期からかは定かではないが、伝路のルートもまた大道と呼ばれていたことがわかる。特に、第21図 f点の「上大道橋」の地名は、大道としての駅路を意識して名付けられた地名と推測され注目される。

きわめて直線的な形態を示す駅路のルートに対し、伝路のルートは、文字通り地域の中心地を結んで形成された地形に合わせた自然発生的な道である。駅路と伝路の関係については、よく高速道路と一般国道との関係にたとえられるが、それはまた鉄道における新幹線と在来線との関係とも類似している。在来線が地域中心地を結んで、地形に合わせて設定されたのに対し、より高速で遠距離をつなぐ新幹線は直線的な経路をとるため、駅も郊外に設けられることが多い。明石・賀古駅間の駅路が一直線に通っているのに対し、伝路は北から張り出す丘陵を避けて、カーブを描き、しばらく駅路と合流した地、再びカーブを描いて北に駅路から離れる。同様にその西南方で、直線的に通る山陽新幹線に対し、JR山陽本線が緩やかにカーブを描いて北から接近し、また北に離れることも偶然の一一致ではないであろう。

明石・賀古・印南郡を通る駅路は、途中長坂寺遺跡の南側で微妙に屈曲するものの、第21図E点から第24図H点までの約17kmをほぼ直線で通っている。これによって、最短距離のルートが開拓されたが、それにこだわったため、加古川下流の氾濫原を横切らなければならないという問題が生じた。それに対し伝路のルートは、迂回路ながらも、丘陵の裾部等を通る自然発生的な道で、加古川についても、駅路より上流の、川幅が狭くて最も渡りやすい日岡山の付近を通っている。このことから吉本は、筆者が伝路として位置づけた長坂寺から第24図H点までのルートを、駅路のバイパスとして解釈しており、加古川氾濫時には、日岡山から烽をあげることによって、駅路の不通を知らせ、バイパスに迂回させたと推測している。それに対し、筆者はこのルートを伝路と解釈したが、これは吉本が示した駅路のバイパスの機能を否定するものではなく、伝路のルートが時には駅路のバイパスとしても使われたことは充分に考えられると思う。

また吉本は、自身が駅路のバイパスとするルートこそが、直線的な駅路が成立する以前の「原初山陽道」であって、遅くとも7世紀第4四半期までに、駅路のルート変更が行われたとする。吉本は、全国的に天武・持統朝を国土整備計画の大きな画期としてとらえ、条里地割の施行や、国郡界の画定、郡家の造営が直線的計画道としての駅路の敷設と同時に行われたとするが、筆者は、直線的計画道路としての駅路の敷設は、対外的な緊張関係から、天武朝の様々な地域計画より一足早い天智朝に行われた箇所が多いと見ている。したがって大化前代には、筆者が言う伝路のルートこそが、「古山陽道」とでもいるべき、都と九州とを結ぶメイン・ルートであったのであろう。すなわち、駅制成立以前においても、当然都と九州とを結ぶ主要道路が存在したはずで、それらは直線道ではなく、各地域の中心地を結んで自然に形成されてきた道路網の一部を単線的に通るものだったと推測されるのである。大化前代のミコトモチは、それらの道路を通りながら、それに面した在地豪族の拠点において、人馬や食事・宿泊の提供など様々なサービスを受けていたと推測される。そういう慣行がやがて、伝制とされていくのであり、その時通った道が伝路となっていたのであろう。このような大化前代の主要道路の研究は、東山道について一志茂樹や黒坂周平が「古東山道」と称して、その復原を行った以外はほとんど行われていないが、「古山陽道」の復原も、今後の大きな課題であり、その際に律令期の伝路の復原が大いに示唆を与えるであろうと予測される。

反対に、駅制終末の状況についても考察する必要があるが、服部昌之は、『時範記』において、承徳3年（1099）に、平時範が国司として因幡國へ下向した際の経過を記した部分に、播磨国では明石駅家と高草駅家しか出てこず、『延喜式』で全国最大の駅馬数を誇った賀古駅家が見えないことについて、その原因が行程にあるのかもしれないが、ルートの変更をも考えなければならないであろうとしている。すなわち、服部は、駅路が加古川水系を横断するに際して、河川の氾濫や流路の変更にどこまで対処し

得たか疑わしく、比較的早い時期に日岡から神吉へかけての洪積台地の縁辺部を走る自然発生的な吉本が言うバイパス道路に再移行したと思われるとしている。はたして『時範記』に賀古駅家が見えないことが、駅路再移行説の根拠になり得るかどうかは、なお検討が必要と思われるが、バイパス道路を伝路に置き換えると、服部が述べるような駅路の再移行は、全国的に見られる現象のようである。すなわち、地形を無視して最短距離をとるように設定された駅路のルートから、自然発生的な伝路のルートへの変更で、それは単なる地形的な問題だけではなく、律令国家の力が衰えて駅制そのものの維持が難しくなると、通行者は在地勢力にたよらなければならなくなるという人文的な問題とも連動していると言える。駅路に沿った野口廃寺⁽³⁷⁾が9世紀ごろまでの存続と考えられているのに対し、伝路に沿った中西廃寺⁽³⁸⁾からは、11~12世紀の瓦も出土するので、平安時代後期まで長く維持されたと考えられることも、駅路のルートよりも、伝路のルートが後世まで活用されたことをうかがわせる。

なお、駅路を踏襲したと見られる現在道と、伝路を踏襲したと見られる現在道の形態を比較すると、前者が定規で引いたような一直線の形態を示すのに対し、後者はそこまでの直線性は示さない。定規で引いたような直線道は、人間が歩くことによっては生じず、必ず測量と工事の必要があり、まさに駅路はそのようにしてできたものであろう。それに対し、伝路は本来自然発生的な道と考えられるので、定規で引いたような直線にはならない。ただし、今回復原した伝路においても、一部直線的な形態を示す区間もあり、部分的に自然発生的な道路を伝路として、直線的に改修した可能性はある。全国的に見ても、下野国芳賀郡家周辺の想定伝路や、肥前国神崎郡家東方の想定伝路などは、駅路と同様の直線的形態を示す部分もある。これは、駅路開通時には、まだ伝路は直線道ではなかったにしても、駅路の影響を受けて、たとえば郡司等が一部伝路を改修して、駅路と同様の直線道にしたとも推測される。あるいは、当初単なる軍事道路として直線的に造られた道が、駅路や伝路に振り分けられていった可能性もある。もっとも、今回復原した伝路については、特に発掘調査が行われた箇所は無く、あくまで地表に残る痕跡から推測しているので、ある時期直線道に改修された伝路のルートが長く使われていくうちに、今日見られるような、やや蛇行した形態に変わっていった可能性もある。また伝路の道幅や、それが側溝をともなっているかなどの構造についても、発掘調査を行わないとわからないので、今後は考古学によるアプローチが望まれるのである。

注

- (1) 木下良「空中写真に認められる想定駅路」『びぞん』64、1976年。同「山陽道の駅路－播磨を中心に－」「古代を考える」17、1978年。
- (2) 吉本昌弘「播磨・西摂の計画古道と条里」『兵庫地理』27、1982年。同「播磨国の中山道古代駅路」「歴史と神戸」24~1、1985年。
- (3) 高橋美久二「古代播磨国駅家の今里幾次先生古稀記念論文集刊行会編『播磨考古学論叢』」今里幾次先生古稀記念論文集刊行会、1990年。同「古代交通の考古地理」大明堂、1995年。
- (4) 吉本昌弘「播磨国邑美・佐安駅家の山陽道古代バイパス」今里幾次先生古稀記念論文集刊行会編『播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論文集刊行会、1990年。
- (5) 前掲注(3)。
- (6) 前掲注(3)。
- (7) 吉本昌弘「播磨國明石駅家・揖津國須磨駅家の古代駅路」「歴史地理学」128、1985年。
- (8) 今里幾次「小犬丸遺跡出土軒瓦の考察」『龍野市文化財調査報告書』8、龍野市教育委員会、1992年。
- (9) 前掲注(1)。
- (10) 兵庫県立考古博物館編『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅰ』兵庫県教育委員会、2010年。
- (11) 明石市教育委員会編『平成13年度明石市埋蔵文化財年報』明石市教育委員会、2003年。

- (12) 明石市教育委員会編『平成15年度明石市埋蔵文化財年報』明石市教育委員会、2008年。
- (13) 前掲注(10)。
- (14) 兵庫県教育委員会編『坂元遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会、2009年。
- (15) 田辺昭三・花田勝広「吉田南遺跡」『仏教藝術』124、1979年。田辺昭三「古代の地方官街跡－推定明石郡街跡の発掘－」『日本美術工芸』485、1979年。
- (16) 山中敏史・佐藤興治『古代の役所』岩波書店、1985年。
- (17) 加古川市誌編集委員会編『加古川市誌 第1巻』加古川市、1953年。
- (18) 西本昌弘「賀古郡家の位置」高砂市史編さん専門委員会編『高砂市史 第1巻』高砂市、2011年。
- (19) 加古川市社会文化財課編『溝之口遺跡発掘調査報告書1』加古川市教育委員会、1992年。
- (20) 吉本昌弘「古代播磨国の郡衙－山陽道沿いの六郡の場合－」『人文地理』35-4、1983年。
- (21) 岡本一七「赤石・賀古・印南郡の古代寺院」第3回播磨考古学研究集会実行委員会編『古代寺院からみた播磨』第3回播磨考古学研究集会実行委員会、2003年。
- (22) 加古川市教育委員会編『西条庵寺発掘調査報告書』加古川市教育委員会、1985年。前掲注(21)。
- (23) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編『石守庵寺現地説明会資料』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、2002年。前掲注(21)。
- (24) 西谷寅治「墓から寺へ」加古川市史編さん専門委員会編『加古川市史 第1巻』加古川市、1989年。
- (25) 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編『美乃利遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会、2006年。
- (26) 今里幾次「加古川出土の古瓦」「文化財教室」6、加古川市教育委員会、1970年。
- (27) 西本昌弘「印南郡の里と郷」高砂市史編さん専門委員会編『高砂市史 第1巻』高砂市、2011年。
- (28) 前掲注(20)。
- (29) 長山泰孝「屯倉の設置」「国府と郡衙」加古川市史編さん専門委員会編『加古川市史 第1巻』加古川市、1989年。
- (30) 吉本昌弘「播磨諸ミヤケの地理的実態」古代を考える会編『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会、1983年。
- (31) 塩田遺跡発掘調査団編『塩田遺跡2』高砂市教育委員会、1979年。間壁貢子「塩田遺跡」高砂市史編さん専門委員会編『高砂市史 第4巻』高砂市、2007年。
- (32) 吉本昌弘「印南郡衙の所在について」「歴史と神戸」183、1994年。
- (33) 西本昌弘「塩田遺跡と墨書き土器」高砂市史編さん専門委員会編『高砂市史 第1巻』高砂市、2011年。
- (34) 山中敏史「地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題－氏寺論の再検討－」奈良文化財研究所編『地方官衙と寺院－郡衙周辺寺院を中心として－』奈良文化財研究所、2005年。
- (35) 筆者は、山中の言う「郡衙周辺寺院」の性格については賛同するが、「郡衙周辺寺院」という名称は、そのような寺院の属性の1つに焦点を当たる言い方なので若干問題を感じる。「郡寺」という若干ほかした名称の方が、それらの寺院の多様な性格を含んでい見えることを見なせるのではないだろうか。もちろん、坂本経堯（「古代肥後の復元・続説」『熊本日日新聞』1965年5月24日号）のように、「郡寺」を單なる郡立寺院の意味に使うのではない。
- (36) 服部昌之「条里制と造構」加古川市史編さん専門委員会編『加古川市史 第1巻』加古川市、1989年。
- (37) 前掲注(4)。
- (38) 石見完二「賀古郡鶴波里の位置確定－小字「舟引」の発見にもとづく－」『歴史と神戸』109、1981年。
- (39) 前掲注(4)。
- (40) 中村太一「日本古代国家と計画道路」吉川弘文館、1996年。
- (41) 前掲注(4)。
- (42) 島方洸一他編『地図でみる西日本の古代』平凡社、2009年。
- (43) 1893、1896年測量、1901年発行、1/5万地形図「高砂町」
- (44) 錦谷本三次「播磨上代寺院址の研究」成武堂、1942年。
- (45) 西谷貞治「播磨国風土記「八十橋」考」「兵庫県の歴史」30、1994年。
- (46) 前掲注(27)。
- (47) 前掲注(29)。
- (48) 1961年国土地理院撮影CG-61-1 (A) 2 C11-9374。
- (49) 今里幾次「中西庵寺」加古川市史編さん専門委員会編『加古川市史 第1巻』加古川市、1989年。
- (50) 錦谷本三次「住吉大社神代記に見える明石郡・加古郡に於ける摂津住吉神社の神領地に就いて」「兵庫史学」

65、1974年。

- (51) 黒田義隆「住吉大社神代記と播磨国明石郡」『すみのえ』142、1976年。
- (52) 前掲注(4)。
- (53) 木本雅康「古代駅路と国府の成立」『古代文化』63-4、2012年。
- (54) 一志茂樹「古代東山道の研究」信海書籍出版センター、1993年。
- (55) 黒坂周平「東山道の実証的研究」吉川弘文館、1992年。
- (56) 服部昌之「駅制終末の様相」加古川市史編さん専門委員会編『加古川市史 第1巻』加古川市、1989年。
- (57) 前掲注(21)。
- (58) 西本昌弘「高砂周辺の寺院」高砂市史編さん専門委員会編『高砂市史 第1巻』高砂市、2011年。
- (59) 木本雅康「下野国の古代伝路について」『交通史研究』30、1993年。
- (60) 木下良「古代道路の複線的性格について－駅路と伝路の配置に関して－」『古代交通研究』5、1996年。
徳富則久「肥前国三根郡の交通路と集落」『古代交通研究』6、1997年。

付記

本稿の執筆にあたっては、下記の方々に大変お世話になった。末筆ながら、ご芳名を記して感謝する次第である。

池田征弘 植原昭嘉 岡本一士 清水一文 種定淳介 中川涉 藤戸翼

第2節 長坂寺遺跡出土の瓦

1 今回の調査成果のまとめと既往の長坂寺遺跡出土の瓦（第25図）

今回調査した長坂寺遺跡出土の瓦については、第2章第4節2において報告している。ここでは、それらについてのまとめを簡単に述べる。

出土軒瓦 これまでに確認された長坂寺遺跡の出土軒瓦は、全て表面採集によるもので、今里幾次がこれらの瓦についてまとめていている（今里1994）。今里によれば、軒丸瓦は5種・軒平瓦4種が確認されており、播磨国府系瓦のⅠ期・続播磨国府系瓦のⅡ期に大別できるとする。Ⅰ期瓦として、軒丸瓦は古大内式Ⅰ型・長坂寺式・北宿式・本町式・毘沙門式Ⅲ型が、軒平瓦は古大内式乙類・長坂寺式・北宿式が認められている。Ⅱ期瓦には、軒丸瓦はなく、毘沙門式系統の軒平瓦が認められている。

今回の長坂寺遺跡の発掘調査から出土した軒瓦は、不明分を除くと、軒丸瓦がNM1（古大内式）、NM2（北宿式）の2型式、軒平瓦がNH1（古大内式）、NH2（長坂寺式）、NH3（北宿式）である。古大内式のNM1については、残存状況が悪いためⅠ型かⅡ型か判別できなかった。また、NH1についても、破片のため甲・乙類の区別ができなかった。成果としては、従来の枠を超えるものではなく、これまでに確認されたⅠ期瓦と同型式の瓦が出土したのみであった。

出土丸瓦 長坂寺遺跡から出土した丸瓦については、既往の研究のなかではほとんど言及されていない。今回の調査の出土資料は破片が多く全容を知れるものが少ないので型式分類を行い、当該報告書では長坂寺遺跡出土の丸瓦についての様相を提示することを目的とした。

丸瓦は、全て玉縁を持つ有段丸瓦で、全体的な規格だけでなく玉縁部の細かい規格と属性の組み合せをもとに、M1～8類に分類できた。規格についてみると、全長はM1類の41.7cmが最も長く、M2類が37cm、M3類が36.4cm、M5類が36.1cmと近い値を示す。一方、玉縁についてみると、まず模骨の形状を表すくびれ部の形態であるが、くびれ部変化点が屈曲するものとあまり屈曲しないものがあり、くびれ部断面ラインが内湾するものとなだらかな曲線を描くものがある。この点に着目すると、M2・3・5類はくびれ部の断面形態が類似する。視点を変えてこれらの玉縁長を比較するとM3類が5.7cm、M2類・M5類が7cm台を測り、玉縁部規格の差異が明瞭である。一方、玉縁部広端外側幅は、M2類が10.4～11cmと狭く、他二者は12cm台と広くなっている。これは、玉縁部成形時の付加する粘土の量に起因すると考えられる。このような差異は、模骨と同じにしながら異なる規格の製作や、あるいは異なる単位工人による製作の可能性を暗示させる。しかし、丸瓦の比較検討はより多くの資料データの蓄積と類型化・相対化が必須であり、今後の課題である。

出土平瓦 長坂寺遺跡から出土した平瓦については、既往の研究では具体的なことは言及されていない。今回の調査の出土資料は、破片が多いが一定量出土しており、型式分類と型式別重量計測を行った。当該報告書では、長坂寺遺跡出土平瓦の様相を提示するとともに、長坂寺遺跡における平瓦の消費の様相を伺える結果を得た。

平瓦はタタキ板等による凸面の調製痕を基準にH1～21類に分類できた。そして、出土平瓦を型式別に重量計測したところ、型式不明分を控除した場合、H5類が出土重量の50%を占めることがわかった。そして次に、H7類（9%）、H18類（8%）、H12類・H15類（6%）が占める。この出土重量比の結果から、長坂寺遺跡ではH5類が主体的に消費され、それ以外の型式が補足的に消費されたことが明らかとなった。ただし、補足的な型式の平瓦がH5類と同時期に消費されたのか、あるいは補修瓦として後に消費されたのか、現段階では判断できない。

また、平瓦の出土量はSX07が最も多く、次にSX01である。出土のあり方をみると、SX01は数多くの型式が少量ずつ出土しているが、SX07は上述した構成の型式が主に出土しており、主体はH5類である。尤も、SX07の出土量が多いため、総量に如実に反映された結果といえる。そして、SX07の出土平瓦がたとえ二次的なものであってもかなりの量がまとまって出土しており、極めて近接する周囲から集積された可能性が高い。つまり、SX07が西面築地に関連する溝とすれば、西面築地の築造当初に使用されていた平瓦の主体はH5類であり、その他に複数型式の平瓦が組合せとしてある段階に使用された可能性が考えられる。なお、南面築地構築土の可能性が指摘される4tr28層出土瓦片については、種類・型式不明で0.1kgを測る極微小片であり、整地時点の混入物の可能性がある。

2 長坂寺式軒平瓦についての一覧

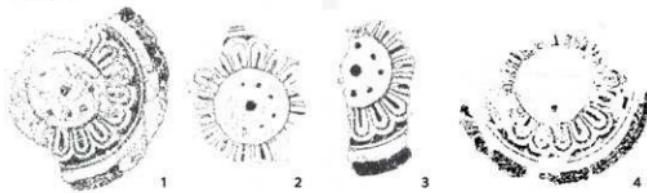
NH2（長坂寺式軒平瓦）について 今回出土した長坂寺式軒平瓦NH2の左側周縁には、報告で述べたようにキリトリスジが認められる。このようなキリトリスジの事例は、市之郷遺跡出土の北宿式軒平瓦にも認められる（垣内2013）。一方、市之郷遺跡からは長坂寺式軒平瓦も出土しているが、キリトリスジは認められない。また、長坂寺遺跡出土及び表採の北宿式軒平瓦は拓本を見る限り、左右・下側周縁のキリトリスジは見られない。次に、顎部形態について見ると、長坂寺遺跡のNH2はやや幅広な顎面を持つ曲線顎Ⅱだが、市之郷遺跡の長坂寺式軒平瓦は直線顎Ⅱを呈する。北宿式軒平瓦については、長坂寺遺跡、市之郷遺跡とともに曲線顎Ⅱを呈する。そして、曲線顎Ⅱの長坂寺式軒平瓦および北宿式軒平瓦の側縁凹面側にはいわゆる「棒状圧痕」が残る。

以上のことから単純に考えれば、長坂寺式軒平瓦には、直線顎Ⅱと曲線顎Ⅱが併存的に製作されたか、あるいはどちらかが時期的にやや前後して出現したとされる。また、キリトリスジの残る技法が、長坂寺式・北宿式軒平瓦の双方に見られ、いずれも曲線顎Ⅱであることからすれば、両様式の制作者の類縁性や、製作時の近接性ないし同時期性が伺える。キリトリスジの出現する長坂寺遺跡と市之郷遺跡で逆になっている点もこのことを支持する。そして、「棒状圧痕」が曲線顎Ⅱの両様式に認められることも共通する技法痕跡といえる。

また、キリトリスジが、瓦范よりも湾曲が大きいあるいは幅広い平瓦を使用することによって瓦当面が幅広くなり、瓦范からはみ出た瓦当面の余分な粘土を切り取った結果として残った技法痕跡とすれば、長坂寺式・北宿式軒平瓦の製作が必ずしも平瓦製作と一緒に行われなかつたことが推測される。今回、NH2の破面で平瓦部と瓦当部の胎土の違いが観察できたことは、平瓦と軒平瓦の製作地ないし製作段階に違いがあった可能性を示唆する。換言すれば、長坂寺式および北宿式軒平瓦の両様式には、瓦范の規格と異なる平瓦が使用されたために、瓦当面をはみ出る余分な粘土を切り取って軒平瓦を製作するという共通の技法が用いられ、かつ曲線顎Ⅱに仕上げられたといえる。そして、このような技法の共通性と顎部形態から、少なくとも同一技法を用いる製作者の存在と、製作時期の近さが推測される。さらには、長坂寺式軒平瓦と北宿式軒平瓦の瓦当文様が極めて類似しているのも、以上のような背景があつた可能性が考えられる。

なお、長坂寺式軒平瓦において、直線顎Ⅱと曲線顎Ⅱの二者が存在する点については、時期的差異や技法的差異の可能性が考えられる。これについては、長坂寺式軒平瓦の集成をふまえた検討が肝要であり、今後の課題としたい。

長坂寺式



北宿式



古大内式



※9

本町式



長坂寺式



15

北宿式



17



20

古大内式



※16



23

昆沙門式



24

出典

1~3・8 宮本 1990、4・18 明石市教育
委員会 1985、5・7・13~15・17・23・24
今里 1995、6・9~12・16・19~22 本書

※印が今回の出土品



第25図 長坂寺遺跡出土の軒瓦

第3節 邑美駅家について

今回の調査では、建物の配列や文字資料など、長坂寺遺跡が駅家と断定できる決定的な証拠が得られたわけではない。しかし奈良時代中頃の遺構に播磨國府系瓦を含む多量の瓦片が伴い、墓地側溝と認定できる遺構から復元できる方形地割のように、従来の研究成果を補強する大きな成果が得られた。よってここからは長坂寺遺跡が邑美駅家であるという前提で話を進める。また煩雑になるので“仮称”は省いて記述する。

1 地中レーダー探査データとの検証（第26図）

今回の調査では、平成20・21年度に実施した地中レーダー探査によって得られた深度ごとの平面図(タイムスライス)をもとに調査トレーニングを設定した。その結果、駅館院推定範囲の南辺の墓地にあたるとみられる1トレーニングでは東西方向の溝状落ち込みを、同じく西辺付近にあたると考えられる2・3トレーニングでは南北の方向性をもつ遺構群と、それに切られる関係で北西-南東の方向性をもつ遺構群などを検出した。ただし見つかった遺構群の中には、探査の有効性が確認できたものと、探査のデータに反映されなかつたものが混在している。その原因の究明は難しいかもしれないが、少なくとも現象面について検証しておくことは、今後の調査につながるものと考えられる。

(1) A-2区のタイムスライスと1トレーニングの遺構

A-2区のタイムスライスでは深度20~25cm付近で、方形地割を示す畦畔の北側に沿って、幅6~7m以上の帯状の輪郭線が認められた。調査の結果1トレーニングでは、表土直下で東西方向の溝状落ち込みS X01を検出した。S X01は探査データとまさに重なっており、タイムスライスが描いた輪郭線はS X01をほぼ正確に捉えたものと言える。これによってS X01はA-2区全体に延びることが確実で、さらに敷衍するならば現状の畦畔に沿って80m近く延長することが考えられる。

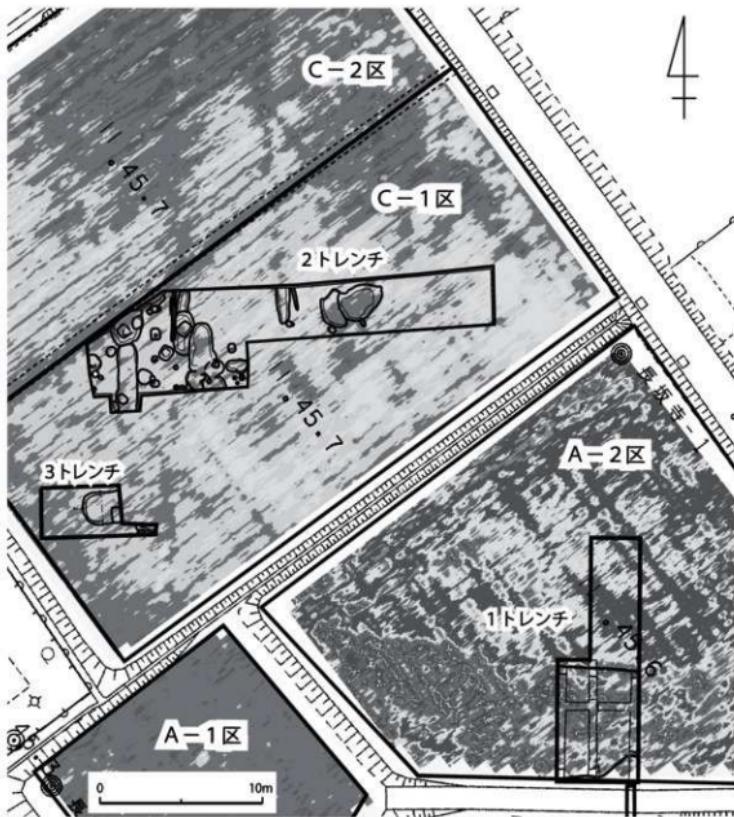
一方、深度55~62cm付近で認められた畦畔に対して直交するラインについては確認に至っていない。また円形状の弱い変化といった所見については、1トレーニングでは対応するものが見当たらず、深度的にもS X01以外は遺構検出面より下になるので、基盤層中の何らかの堆積に反応した可能性が考えられる。

(2) C区のタイムスライスと2・3トレーニングの遺構

C区のタイムスライスでは深度25cm前後で、北隅から南隅へ向かう対角線方向に、約6mの間隔で平行する2本の直線的な輪郭線が認められた。レーダー反応は弱く、ごく浅い遺構と予想されるものであった。調査の結果2トレーニングでは、対応する箇所に南北方向の溝S D01・02あるいは上層溝1・2を検出した。上層溝1・2の埋土の粗砂層に反応したことも考えられるが、位置や規模からするとS D01・02の方がより蓋然性が高い。つまり幅70~80cm、深さ5cmの浅い溝2本が約6mの間隔をおいて、C区を南北に貫通していたと考えられる。

こうした浅い遺構がタイムスライスで捉えられた一方、同じ南北の方向性をもち、より規模の大きいS X02~08などの遺構はレーダー画像に現れていないかった。特に瓦片が詰まっていたS X07が捉えられなかつたのは不可解で、説明できない。このため西辺の墓地側溝と想定している遺構群の延長は、レーダー画像では不明のままである。

また北西-南東の方向性をもつ遺構群についても画像では捕捉されていないが、これらについては埋土が基盤層とほぼ同質で、肉眼でも識別が困難であった点と、遺物や石がほとんど入っていないという状況を考えると、電波の反射による検出はもともと困難な事例であったらうかと理解できる。



第26図 地中レーダー探査結果との検証図

2 南北の方向性をもつ遺構について（第6・9図）

(1) 1・4トレンチにおける南辺の築地関連遺構

東西方向の溝状落ち込み S X01は幅5.2~7.1m、検出面からの最大の深さ43cmで、埋土から軒瓦を含む多量の瓦片が出土した。瓦片は二次的な廃棄であるが、長坂寺遺跡における正方位の方形地割に平行するところから、この遺構が築地側溝であることは確実と考えられる。ただし S X01の北側は削平、南側は地下げを被っていて、対になるはずの側溝が残存していないため、築地本体が S X01の南北どちらにあったか未確定である。そこで1・4トレンチの調査データから築地の位置について検討を加える。

最も素直な解釈としては、方形地割を示す畦畔をその痕跡と考えて、南側に築地があったとする見方である。その場合、S X01の南肩に盛土されていた28層（第7図の1・4トレンチ東壁断面図参照）が築地本体の盛土の一部と考えることも可能である。その場合、28層を覆う17層は S X01埋土の最上層につながるため、S X01が埋積した時点では築地は速やかに崩されていたということになる。ただしその位

置としての記憶や属性は引き継がれていて、江戸時代に畦畔が造成された時もおおむねその場所を踏襲し、大字界として機能したと解釈しうる。

一方、それに対して否定的な要素としては、S X01南辺が曲線的で、地盤の高さも北肩より約10cm、28層下の基盤層では20~30cm低い緩斜面となっている点が挙げられる。北側は削平を受けているので、比高差はさらに拡大すると考えられ、低い地盤に築地塀を築くという不合理が生じる。また28層にごくわずかだが瓦片が含まれているというのも、順序としては逆になる。

築地本体がS X01の南側であったと仮定すると、以上のような正負の要素が並列することになる。一方では北側にあったという考古学的証拠も得られていない。そこで現段階では結論を保留して、両方の可能性を残さざるを得ない。

(2) 2・3トレンチにおける西辺の築地関連遺構

S X07は二次的に持ち込まれた瓦片で埋まっているが、南北方向の直線的な溝状を呈するところから、築地側溝と理解するのが順当な造構である。その東側に約3.25mの空間をおいて平行するS X02~04は、位置関係や規模からみて、対応する築地側溝と考えられる。不整形な掘り込みが連続するような区画溝は、鳥取県不入岡遺跡などの例がある〔中山2003〕。なおS X02からは完形に近い平瓦が3点出土している。その出土状況は古大内遺跡のS X07下層から出土した完形の平瓦と共通したものがある〔兵庫県立考古博物館2010〕。その他S X05・06も方向性や位置関係を共有するので、築地に関連した造構の可能性がある。また3トレンチのS X08も延長線上の遺構だが、若干のずれをもつ。

なお築地側溝間の中央西寄りに位置する柵列S A01は、築地に先行する柵状の区画、もしくは築地施工に伴う何らかの工程を示す可能性がある。

S D01・02も側溝状の南北溝であるが、規模や切り合い関係から、築地側溝としては評価していない。ただし探査データが南北の延長を示している点は注意が必要である。

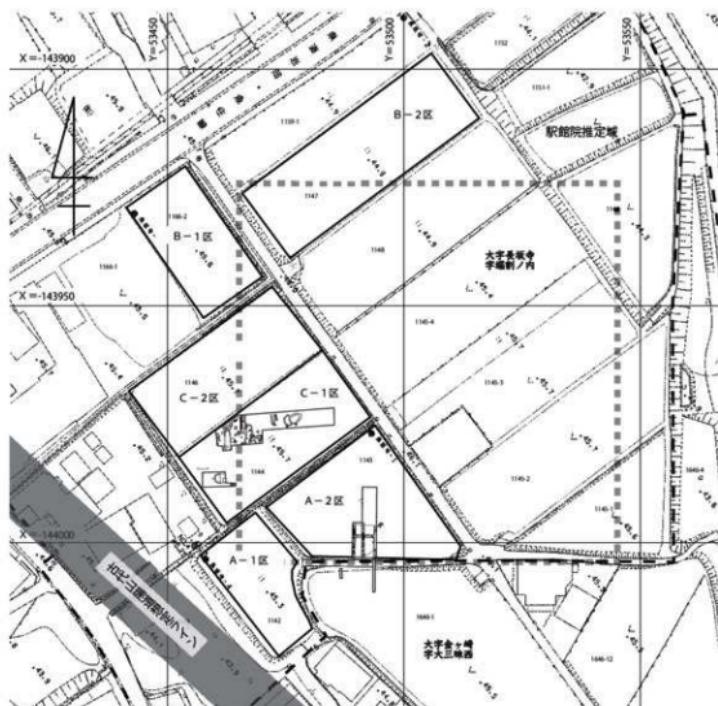
(3) 駅館院の復原と山陽道の関係

正方位で約80m四方とされる駅館院の範囲を、前回の報告では地中レーダー探査のデータに基づいて想定した〔兵庫県立考古博物館2010〕が、発掘調査の成果から西辺をS X07とS X02~04の中間線に設定し、不確定な南辺の築地を仮に字界の畦畔としたのが第27図である。これをみると駅館院の南西隅は南東方向から段丘崖をのぼって来る山陽道に10数mまで接近し、さらに段丘上において両者は同一平面に相対する。この関係は古大内遺跡の場合をちょうど180°回転させたものと同一で、山陽道からの進入口は西側に面していたとの類推が可能である。また古大内遺跡の入口が東辺の中心ではなく南寄りにずれていた点を、内部の建物配置との関係によるものと理解すると、想定範囲西辺の中心から若干南へ寄っている2トレンチも、あるいは入口付近を調査していたと考えられなくもない。

山陽道の遺構も検出できていない段階では、類推に類推を重ねるだけのことになるため、これ以上の推論は慎むが、山陽道に面した西側に入口があった可能性は高い。

(4) 出土遺物からみた瓦葺駅館院の時期

今回の調査で出土した土器はごくわずかで、8点の須恵器を図化したに過ぎない。その中で重要なのはS X01出土の広口壺(4)で、加古川市中谷4号窯〔兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所2000〕に類例が求められるものである。中谷4号窯産の須恵器は平城宮S D5100から、神龟2(725)~天平11(739)年の年紀をもつ二条木簡と一括で出土していて〔奈良国立文化財研究所1995〕、基仁京への遷都(740)以前の天平年間前半の年代が与えられる定点資料とされている〔森内2000〕。また包含層の出土



第27図 山陽道と呂美駅家の関係図

であるが、杯B（2）は灰白色の精良な胎土で、底部外面をロクロ回転でケズリ調整する中谷4号窯の甲類と同じ技法が用いられている。

こうした8世紀前葉に遡る資料がある一方、長坂寺式軒平瓦は前述のように今里氏によって8世紀第3四半期以降に位置付けられ、古大内式軒丸瓦は焼成不良の細片でI型かII型かの識別もできないが、布勢駅家の検討〔龍野市教育委員会1992・1994〕や、平城京にあった播磨國の調邸とされる左京五条四坊九・十坪、五条条間北小路などでの出土状況〔原田・池田ほか2005〕から、8世紀後半と評価されている。

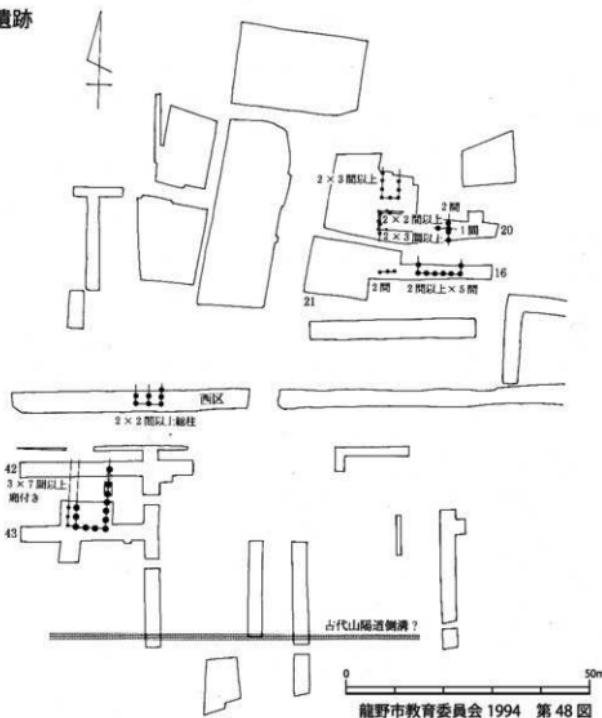
あまりにも限られた点数で細かいことは云々できないが、8世紀前葉～後半の幅の中で考慮すべき資料と考えられ、特に8世紀のどこまで遡れるかは、今後の大きな課題である。

3 北西－南東の方向性をもつ遺構について（第12図）

（1）2トレンチにおける築地に先行する遺構

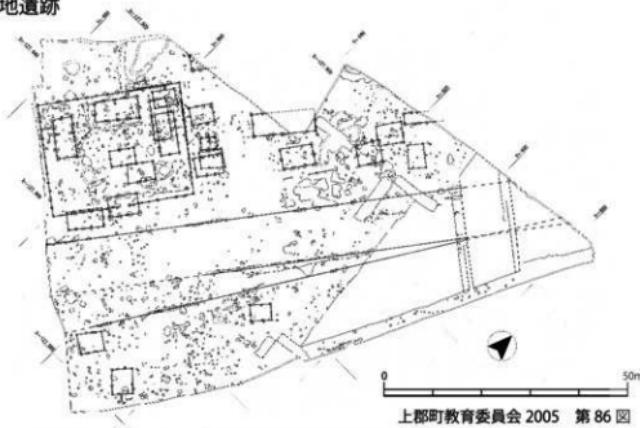
上記の遺構群に切られる関係で検出された掘立柱建物S B01・02は、柱列の方位がN40°~46°Wを示し、ほぼ古代山陽道の傾きに一致している。2棟は1~2間×2間以上の側柱建物で重なりあっているが、前

小犬丸遺跡



龍野市教育委員会 1994 第 48 図

落地遺跡



上郡町教育委員会 2005 第 86 図

第28図 布勢駅家と野磨駅家の掘立柱建物

後関係は不明である。古代山陽道想定ラインから北東へ約35m離れており、遺構群はそこから南西方向に広がる傾向をみせている。掘り方に土器がほとんど含まれず瓦も出土しないため、遺構の時期を抑えるのは困難だが、瓦葺駅館院に先行して、山陽道に面する掘立柱建物群が存在したのは明らかである。

(2) 瓦葺駅館院に先行する掘立柱建物群の事例（第28図）

同様な事例は布勢駅家（たつの市小丸遺跡）と野磨駅家（上郡町落地遺跡）など他の駅家遺跡でも見つかっている。

小丸遺跡では、瓦葺駅館の下層遺構として少なくとも9棟の掘立柱建物群が検出された。全容は明らかでないが、3間×7間以上の廟をもつ南北棟など、規模の大きい特殊な建物も含まれ、礎石瓦葺駅館が運営される以前の第1次駅家－初期駅家と評価されている〔龍野市教育委員会1994〕。

落地遺跡の瓦葺駅館院のある飯坂地区から南西へ約1km離れた八反坪地区では、東西約30m、南北約23mの堀で囲まれた掘立柱建物群が検出され、南辺の堀の中央には山陽道に面して八脚門が置かれていた。堀で区画された院内には、4～5間×2間の正殿・脇殿がコの字形に配置され、建て替えも認められた。柱穴から7世紀末～8世紀初頭の土器が出土しており、瓦葺に先立つ初期駅家の駅館院全容が判明した事例と考えられる〔上郡町教育委員会2005〕。

平成24年には福岡県柏原町内橋坪見廻寺跡で、山陽道に面する官衙遺構として、掘立柱建物が発見された〔柏原町教育委員会2012〕。これが瓦葺駅館に先行する駅家施設と認められるならば、初期駅家の存在は播磨国にとどまらず、山陽道の駅家全体に共通する事象となる可能性が高まってきた。

(3) 掘立柱建物群の評価

長坂寺遺跡の掘立柱建物についても同様な理解が可能と考えており、山陽道の北東側に面して、初期駅家を構成する遺構群が存在したのではないかと予想される。全体のごく一部を捕捉した段階であるので具体的に言及できることは少ないが、柱穴の大きさは公的な施設として充分な規模といえ、柱痕の検出が困難であったのは柱を抜き取られていたためではないかとみられる。

柱穴からは遺物がほとんど出土しなかったため、建物群の時期は瓦葺駅館をさかのほるとしか判断できない。出土遺物の中で、3トレンチS K09出土の杯G蓋（3）は6世紀末～7世紀初頭の年代を示すが、駅家以前の遺物と考えられる。

4 終わりに

平成22・23年度に実施した調査では、限られた範囲・期間にもかかわらず重要な多くの発見があった。これによって長坂寺遺跡の瓦葺駅館院の存在がほぼ裏付けられたと考えられる。さらにそれをさかのほる初期駅家の手掛かりも得られたのは大きな収穫であった。幻と言われた「邑美駅家」の具体像が垣間見えたと言うことができる。

ただし同地は明治末期～大正時代にかけて行われた耕地整理によって大きく改変されており、礎石・基壇などの痕跡は見つからなかったため、駅館院内部の様子については明らかとならなかった。また検出した遺構も上部が数10cm単位で削平されていることを念頭におかねばならない。遺構の保存状況が比較的良好な遺跡の西半部にはまだ多くの情報が眠っていると予想される。

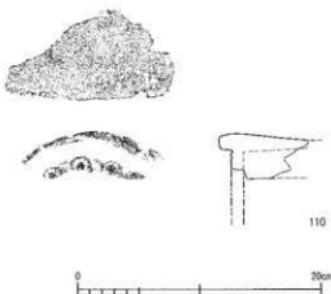
現地に立っても遺跡の存在をうかがわせる表徵に乏しい中、数々の成果が挙げられたのは先学の研究の積み重ねによる導きの賜物である。また調査にあたっては土地所有者・地元自治会をはじめ、多くの関係者・関係機関のご理解・ご協力をいただいた。最後に記して感謝を表したい。

補 遺

第1節 古大内遺跡出土の軒丸瓦

この軒丸瓦（110）は古大内遺跡内に位置する大歳神社内で出土したものである。平成21年度に大歳神社内に置かれていた唐居敷を調査した時、唐居敷Iの移動を行った。この瓦はその掘え付け穴のゆるんだ土の中から出土したものである。

單弁蓮華文で、古大内式とみられる。丸瓦は接合式で、内区蓮弁部外半の裏側に相当する位置あたりに貼り付けている。丸瓦凸面に粘土を補充しているが、凹面部の粘土は剥離している。丸瓦部凸面はタテナデ、瓦当側面はヨコナデが施されている。焼成は軟質で、色調は浅黄色を呈している。



第29図 古大内遺跡出土の軒丸瓦

第2節 長坂寺遺跡採集の瓦

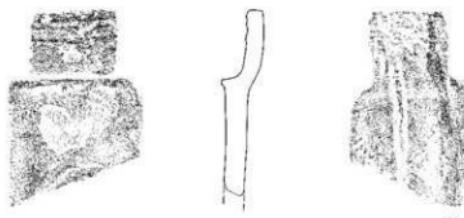
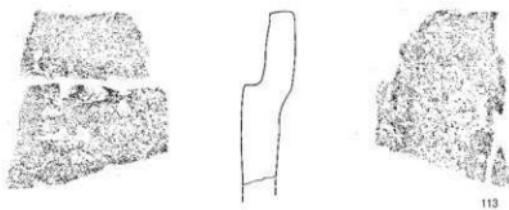
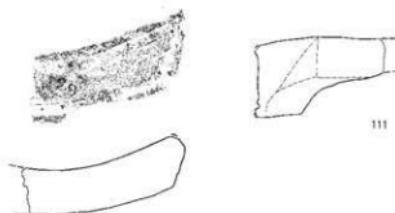
当資料は本館に保管されているもので、昭和54年2月27日に長坂寺遺跡で採集されたことが記されたカードが付されていた。採集者については不詳であるが、近隣の魚住窯跡群で昭和54年に発掘調査が行われていることから、その周辺の踏査などによって採集されたものと思われる。

保管されている瓦はコンテナ1箱で、軒平瓦、丸瓦、平瓦などがある。

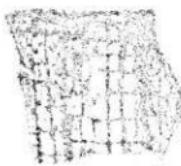
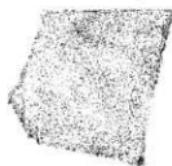
軒平瓦（111・112）瓦当面が著しく磨滅しているが、文様の残存部分から考えると北宿式と考えられる。頭部は曲線頭で、頭面はヨコケズリ、頭部裏面から平瓦部凸面はタテケズリ、瓦当上縁は幅4.5cmのヨコケズリが施されている。平瓦部凹面は布目後タテナデが施されている。凹面側縁には横方向に棒状の圧痕が付いている。焼成はやや不良で、色調は断面が暗灰色、表面が黒色である。胎土には径2mm以下の砂粒を含んでいる。

丸瓦（113・114）113は玉縁部が水平に延びるもので、くびれ部はなだらかである。表面はほとんど磨滅しており、丸瓦部凹面に布目を残すのみである。焼成は不良で、色調は灰白色である。胎土には径1mm以下の砂粒を含んでいる。114は玉縁部が水平に延びるもので、くびれ部はやや内窓している。丸瓦部凸面はタテケズリが施されているが、玉縁側の端までは及んでいない。玉縁部凸面にはヨコナデによる凹凸が明瞭である。焼成はやや不良で、色調は灰白～灰黄色である。径2mm程度の砂粒を含んでいる。

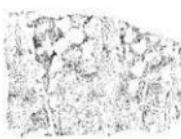
平瓦（115～117）115はH4類である。凹面は磨滅しておりはっきりしないが、狭端際はケズリが施されていると思われる。焼成は不良で、色調は灰白～灰黄色である。胎土に2mm以下の砂粒を含んでいる。116はH5類である。凸面はタキの後かなりの部分にケズリが施されている。凹面は布目を残しているが、布端は側端のやや内窓までしか及んでいない焼成は良好で、色調は灰色である。胎土には2mm以下の砂粒が含まれている。117はH21類である。凸面は無文タキが施されている。凹面は布目の後タテナデが施され、端面際のみヨコナデが施されている。焼成はやや不良で、色調は灰白～灰黄色である。胎土には細かい砂粒が含まれている。



第30図 長板寺遺跡採集の瓦（1）



115



116



117

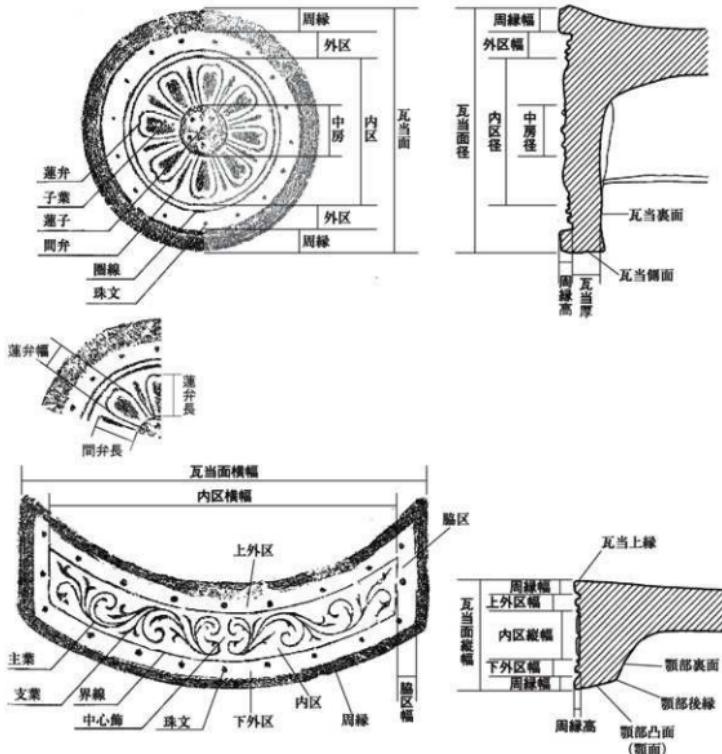


第34図 長板寺遺跡採集の瓦（2）

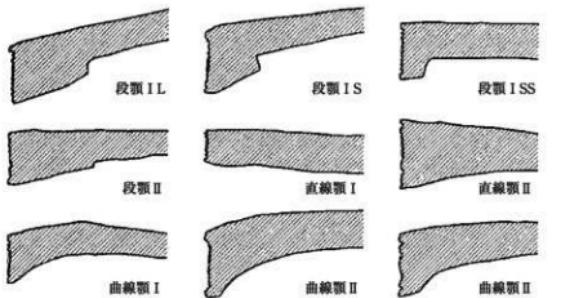
参考文献

- 青木哲哉 2010「邑美駅家～賀古駅家における古代山陽道と地形環境」『兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅰ』
兵庫県文化財調査報告第384冊 兵庫県教育委員会
- 明石市教育委員会 1985「明石市史資料（考古篇）」第4集
- 明石市教育委員会 2008「平成15年度明石市埋蔵文化財年報」
- 井内古文化研究室 1990「東播磨古代瓦聚成」
- 今里幾次 1960「播磨国分寺式瓦の研究」播磨郷土文化協会会（『播磨考古学研究』に所収）
- 今里幾次 1971「姫路市辻井遺跡－その調査記録－」古代播磨研究会
- 今里幾次 1974「兵庫県の瓦葺駅家」「兵庫県の歴史」第12号
- 今里幾次 1980「播磨考古学研究」精文舎
- 今里幾次 1984「姫路市本町遺跡の古瓦」「本町遺跡」姫路市（『播磨古瓦の研究』に所収）
- 今里幾次 1992「龍野市小丸遺跡の古瓦」「布施駅家」龍野市教育委員会（『播磨古瓦の研究』に所収）
- 今里幾次 1993「播磨国分尼寺跡の古瓦」「播磨国分尼寺跡」（『播磨古瓦の研究』に所収）
- 今里幾次 1994「古瓦から邑美駅家を復元する」「歴史と神戸」185（『播磨古瓦の研究』に所収）
- 今里幾次 1995「播磨古瓦の研究」真陽社
- 今里幾次 2010「本町遺跡」「姫路市史」第7巻下 姫路市
- 大船瀬 1991「研究ノート 丸瓦の製作技術」「研究論集Ⅳ」奈良国立文化財研究所学術報第49冊
- 垣内拓郎 2013「市之郷廃寺出土瓦」「市之郷遺跡V」兵庫県文化財調査報告第454冊 兵庫県教育委員会
- 柏原屋教育委員会 2012「内橋坪見廃寺跡発掘調査現地説明会」
- 鎌谷木三次 1942「播磨上代寺院址の研究」
- 上郡町教育委員会 2005「落地遺跡（八反坪地区）」上郡町文化財調査報告3
- 上郡町教育委員会 2006「古代山陽道 野府駅家跡」上郡町文化財調査報告4
- 京都市埋蔵文化財研究所 1996「木村捷三郎収集瓦図録」
- 岸本道昭 2006「山陽道駅家跡」日本の遺跡11 同成社
- 木本雅康 2008「遺跡からみた古代の駅家」日本史リブレット69 山川出版社
- 近藤喬一 1982「瓦の范と瓦当」「考古学論叢」一小林行雄博士古稀記念論文集－平凡社、pp615～642
- 佐川正敏 1989「第2章 中世・近世の瓦」（小林謙一・佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦」法隆寺昭和資料
帳幕編所編「法隆寺昭和資料帳調査概報」伊河留我」小学館）
- 高橋美久二 1982「古代の山陽道」小林行雄先生古稀記念事業会編「考古学論考」平凡社
- 龍野市教育委員会 1992「布勢駅家－小丸遺跡1990・1991年度発掘調査概報」龍野市文化財調査報告8
- 龍野市教育委員会 1994「布勢駅家－小丸遺跡1992・1993年度発掘調査概報」龍野市文化財調査報告11
- 同志社大学考古学研究室 1987「明石市城の遺跡詳細分布調査（I）」明石市教育委員会
- 中村弘 2010a「加古川市古大内遺跡の発掘調査」「兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅰ」兵庫県文化財調査
報告第384冊 兵庫県教育委員会
- 中村弘 2010b「賀古駅家について」「兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅰ」兵庫県文化財調査報告第384冊
兵庫県教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1995「平城京 左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告－長屋王邸・藤原麻呂邸の調査－
奈良県教育委員会
- 奈良市教育委員会 2009「播磨國からやってきた瓦」「奈良市埋蔵文化財センター速報展示資料」No.39
- 奈良市教育委員会 2012「播磨國から来た鬼瓦」「奈良市埋蔵文化財調査センター速報展示資料」No.45
- 原田憲二郎・池田富貴子ほか 2005「平城京跡（左京五条四坊七・九・十坪）の調査 第459-1・-2・-3・-4次」
「奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成13年度」奈良市教育委員会
- 原田憲二郎ほか 2012「平城京跡（左京五条四坊九・十・十五・十六坪・五条条間北小路・東四坊間東小路）
の調査 第608次F・G発掘区・第622次A・B・C・D発掘区」「奈良市埋蔵文化財調
査年報 平成21（2009）年度」奈良市教育委員会
- 播磨考古学研究会 2003「第3回播磨考古学研究集会の記録 古代寺院からみた播磨」
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財発掘調査事務所 2000「志方窪跡群Ⅰ－中谷支群－」兵庫県文化財調査報告第203
冊 兵庫県教育委員会

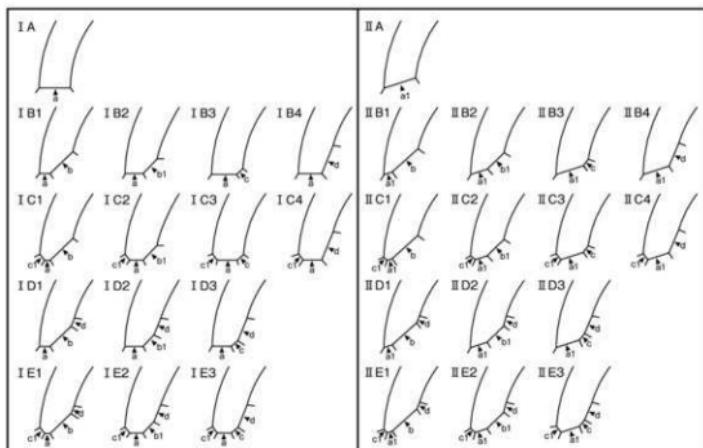
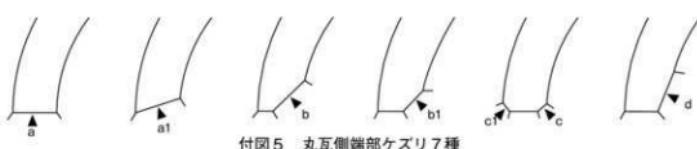
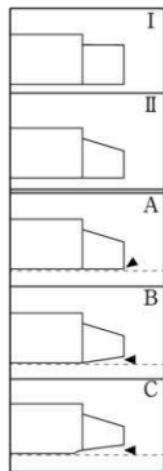
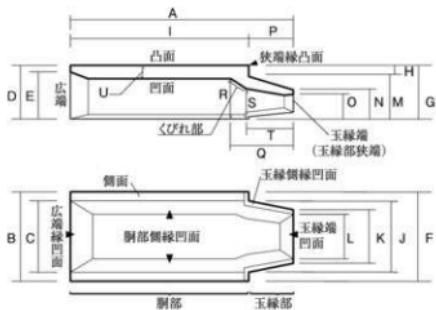
- 兵庫県立考古博物館 2010「兵庫県古代官道関連遺跡調査報告書Ⅰ」兵庫県文化財調査報告第384冊 兵庫県教育委員会
- 宮本郁雄 1990「播磨の古瓦－赤松啓介氏採集品より－」「神戸市立博物館研究紀要」第7号
- 森内秀造 2000「中谷4号窯出土遺物について」「志方窯跡群－中谷支群－」兵庫県文化財調査報告第203冊 兵庫県教育委員会
- 毛利光俊彦 1991「第IV章1 屋瓦」「平城宮発掘調査報告X III」奈良国立文化財研究所
- 山中敏史 2003「V-2墓地群」「V-4溝・濠・塚」「古代の官衙遺跡 I 遺構編」奈良文化財研究所
- 山根実生子 1986「瓦」「小丸遺跡 I」兵庫県文化財調査報告書第47冊 兵庫県教育委員会
- 吉本昌弘 1990「播磨国邑美・佐突駅間の山陽道古代バイパス」「今里幾次先生古稀記念 播磨考古学論叢」

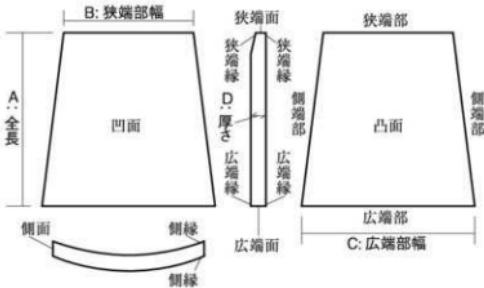


付図1 軒丸瓦・軒平瓦の瓦当部各部名称（（京都市埋文研 1996）を基に追記修正）

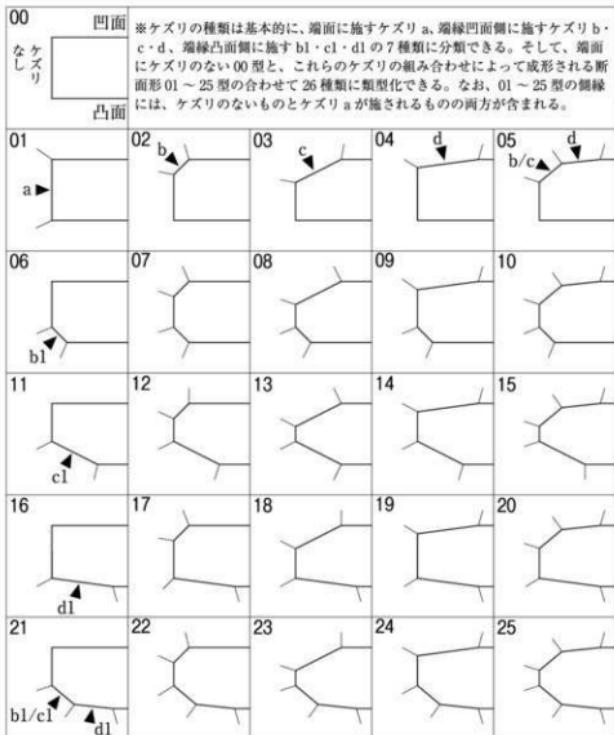


付図2 軒平瓦の頸部形態分類（（京文研 1991）を一部改変）





付図7 平瓦の部位名称
《※本文中の級横は、狭端部を上にした場合を表す。》



付図8 平瓦端部のケズリの種類及び組み合わせと断面形の類型模式図



付図9 平瓦側端部ケズリ調整8種

I 01 a	I 02 c	I 03 d	I 04 e	I 05 c/d c/d/e
I 06 f	I 07 c	I 08 d	I 09 e	I 10 c/d c/d/e
I 11 g	I 12 c	I 13 d	I 14 e	I 15 c/d c/d/e
I 16 h	I 17 c	I 18 d	I 19 e	I 20 c/d c/d/e
I 21 f/g f/g/h	I 22 c	I 23 d	I 24 e	I 25 c/d c/d/e
II 01 b	II 02 c	II 03 d	II 04 e	II 05 c/d c/d/e
II 06 f	II 07 c	II 08 d	II 09 e	II 10 c/d c/d/e
II 11 g	II 12 c	II 13 d	II 14 e	II 15 c/d c/d/e
II 16 h	II 17 c	II 18 d	II 19 e	II 20 c/d c/d/e
II 21 f/g f/g/h	II 22 c	II 23 d	II 24 e	II 25 c/d c/d/e

※「/」を挟んで表記するケズリは、もう一方のそれらと組合せになる。そして、凹面側と凸面側のケズリの組合せは、それぞれ区別する。

例えば、I 25型の場合、凹面側のケズリについて、側面寄りのケズリcとの組合せは、凹面中央寄りのケズリc-d-eが想定される。一方、凸面側のケズリについて、側面寄りのケズリfとの組合せは、凹面側のケズリf-g-hが想定される。

ただし、ケズリc-dやケズリf-gの組合せ、あるいはケズリc-d-f-gの同種同士の組合せは、痕跡からはそれぞれ区別が困難な場合がある。この場合、I 05型・II 05型の縦列や、I 21型・II 21型の横列のケズリの組合せの断面類型に含める。また、同一面側を3回以上ケズリを施すものの存在も想定されるが、側面のケズリや反対面側のケズリとの痕跡からの判別が困難である場合があり、I 25型やII 25型に含める。

なお、模式図はケズリの順序を示すものではない。

付図10 平瓦側端部ケズリと断面形類型模式図

付表4 出土平瓦型式分類表

型式分類名	規格(cm)				第一次成形 技法	凸面調整痕の特徴	凸面調整技法
	全長	狭端部 横幅	広端部 横幅	厚さ			
H1類	不明	不明	不明	2.2~2.4	粘土板一枚 作り	縦平行条線	板状工具によるタテナデ (ハケメ調整) (後に縦位のナデ消し)
H2類	不明	不明	不明	2.3	粘土板一枚 作り	正格子目I	タタキ板による縦位のタタキ
H3類	不明	21.9	不明	2.0~2.2	粘土板一枚 作り	縦長格子目I	タタキ板による縦位のタタキ
H4類	不明	不明	不明	2	粘土板一枚 作り	縦長格子目II	タタキ板による縦位のタタキ
H5類	38.0~ 38.7	27.3	30.4	1.8~2.3	粘土板一枚 作り	方形斜格子目I	タタキ板による縦位のタタキ (後に端部をナデ調整するものあり)
H6類	不明	不明	25.6	2.0~2.4	粘土板一枚 作り	方形斜格子目II	タタキ板による縦位のタタキ
H7類	不明	不明	不明	1.7~2.1	粘土板一枚 作り	偏斜格子目I	タタキ板による縦位のタタキ
H8類	不明	不明	不明	2.0~2.1	粘土板一枚 作り	偏斜格子目II	タタキ板による縦位のタタキ後 一部ナデ
H9類	不明	不明	不明	1.8	粘土板一枚 作り	偏斜格子目III	タタキ板による縦位のタタキ後 一部ナデ
H10類	35.3	24	2.77	1.8	粘土板一枚 作り	偏斜格子目IV	タタキ板による縦位のタタキ後 一部ナデ消し
H11類	不明	不明	不明	2	粘土板一枚 作り	偏斜格子目V	タタキ板による縦位のタタキ
H12類	不明	不明	27	1.8~2.3	粘土板一枚 作り	偏斜格子目VI	タタキ板による縦位のタタキ後 一部ナデ
H13類	不明	不明	不明	2.2	粘土板一枚 作り	縦長斜格子目I	タタキ板による縦位のタタキ
H14類	不明	不明	不明	2.4	粘土板一枚 作り	縦長斜格子目II	タタキ板による縦位のタタキ
H15類	36.5	23	26.5	1.8~2.3	粘土板一枚 作り	横長斜格子目I	タタキ板による縦位のタタキ
H16類	不明	不明	不明	1.6~1.9	粘土板一枚 作り	横長斜格子目II	タタキ板による縦位のタタキ
H17類	不明	不明	25.5	2.4	粘土板一枚 作り	特殊I	タタキ板による縦位のタタキ
H18類	不明	26.7	不明	1.8~2.4	粘土板一枚 作り	素文	タタキ板による縦位のタタキ
H19類	不明	不明	不明	1.7~2.2	粘土板一枚 作り?	縄目I	縄(細)を縦方向に巻き付けたタタキ 板による縦位のタタキ
H20類	不明	不明	不明	2.0~2.7	粘土板一枚 作り	縄目II	縄(太)を縦方向に巻き付けたタタキ 板による縦位のタタキ
H21類	不明	不明	不明	1.8~3.0	粘土板一枚 作り	不明タタキ のちナデ	タタキ板によるタタキの後ナデ

技術的諸特徴						
凹面調整痕の特徴	狭端部調整	狭端部断面形	広端部調整	広端部断面形	側縁・側面調整	側端部断面形
布目・一部タテナデ	abb1	07	ab	02	bghe/bce/bc	II 24 / II 05 / II 02
布目・一部タテナデ・狭端凹面ヨコナデ	a	01	不明	不明	不明	不明
布目、布目・一部ナデ消し、布目・ナデ消し	ab	02	a	01	bc/aef	II 02 / I 07
布目	不明	不明	不明	不明	不明	不明
布目、布目・一部板状工具によるタテナデ消し	abb1/ad1/a/acd1b1/ab/	07/16/01/23/02/	a/ab/abd	01/02/05	bec·bdc/acf/bc/bd/	II 05 / II 07 / II 02 / II 03
布目・板状工具による一部タテナデ消し	不明	不明	ab/a	02/01	bd	II 03
布目・一部タテナデ	acb1	08	adc	05	acg/ade	I 12 / I 05
布目・板状工具による一部ナデ消し	不明	不明	a	01	a/ad	I 01 / I 03
布目・一部タテナデ消し	不明	不明	不明	不明	不明	不明
布目・一部タテナデ消し	a	01	ab	02	bc	II 02
布目・一部タテナデ消し	不明	不明	不明	不明	不明	不明
布目・タテナデ消し	ab	02	ab	02	bd/bc	II 03 / II 02
布目・一部タテナデ消し	不明	不明	不明	不明	不明	不明
摩滅により不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
布目・一部ナデ消し	abd1/abb1	17/07	ab/a	02/01	bd/bc/bdc	II 03 / II 02 / II 05
布目・板状工具による一部タテナデ	a/ab	01/02	不明	不明	b/bcf/bc	II 01 / II 07 / II 02
布目	不明	不明	a	01	bc	II 02
布目	a/ad/abb1	01/04/07	不明	不明	bc/aef	II 02 / I 07
布目	不明	不明	不明	不明	不明	不明
布目	不明	不明	不明	不明	bec	II 05
布目・一部ナデ消し	a	01	ad	04	bec/bech/bd/acf/bc	II 05 / II 20 / II 03 / I 07 / II 02

端部調整の記号は端部に施されたケズリの種類。記号順番はおおよそ施された順番を表す。
端部調整間の「/」と断面形の「/」は対応する。

()内のものは主体ではない。

不明：欠失等により計測・観察不能

付表5 出土瓦観察表

軒丸瓦

報告番号	出土地区	出土位置	型式分類 (今里分類)	法 量 (cm)							
				瓦当面径	瓦当厚	内区径	蓮弁長	蓮弁幅	間弁長	中房径	周縁高
9	A-2 1Tr	SX01	NM 1 (古大内式)	(14.5)	2.6		3.7	1.9		(4.5)	0.4
10	4tr	包含層	NM 1 (古大内式)	(14.0)	0.9			1.95			0.5
11	C-1 2Tr	SX06	NM 1 (古大内式)	(15.0)	2.5		3.8	2.0		(4.5)	0.7
12	A-2 1Tr	SX01	NM 1 (古大内式)					2.0			0.6
13	4tr	包含層	NM 2 (北宿式)	(16.8)							0.5
14	A-2 1Tr	SX01	不明								0.7

軒平瓦

報告番号	出土地区	出土位置	型式分類 (今里分類)	法 量 (cm)							
				瓦当面横幅	瓦当面縱幅	内区横幅	内区縱幅	上外区幅	下外区幅	脇区幅	周縁高
15	4tr	包含層	NH 1 (古大内式)								0.6
16	4tr	盛土	NH 2 (北宿式Ⅱ型)				2.5	0.7	0.8		
17	A-2 1Tr	SX01	NH 3 (長坂寺式)		5.2		2.5	1.7	1.7	1.7	0.2
18	A-2 1Tr	SX01	不明								0.2
19	A-2 1Tr	SX01	不明								0.4

鬼瓦

報告番号	出土地区	出土位置	型式分類 (今里分類)	法 量 (cm)			重量 (kg)	調 整			
				全長	幅	厚さ		表面	裏面	側面	抉り込み部
99	A-2 1Tr	SX01	I類 (不明)			4.8	0.7	糸切り	糸切り	ナデ	ヨコケズリ後ナデ

熨斗瓦

報告番号	出土地区	出土位置	型式分類	法 量 (cm)			重量 (kg)	凸面調整技法		
				全長	狭端部幅	広端部幅		厚さ	タタキ板による 縦位タタキ	タタキ板による 縦位タタキ
100	A-2 1Tr	SX01	H3類				1.4	0.08	タタキ板による 縦位タタキ	
101	C-1 2Tr	SX07	H3類				1.0	0.14	タタキ板による 縦位タタキ	
102	A-2 1Tr	SX01	H11類				1.3	0.32	タタキ板による 縦位タタキ	
103	C-1 2Tr	包含層	H12類			11.3	1.8	0.24	タタキ板による 縦位タタキ	
104	A-2 1Tr	SX01	H12類				2.0	0.28	タタキ板による 縦位タタキ	

周縁幅 全長	重量 (kg)	丸瓦の接合	瓦芯 タイプ	丸瓦部調整	胎 土	焼成	色調	備 考
(1.0)	0.4	接合式 瓦当裏面上 端貼り付け	Aタイプ	凸面：不明 凹面：不明	やや粗。Φ1mm砂粒 微量含む。	軟質	暗褐	瓦当裏面タテナ デ調整
1.05	0.18	接合式 瓦当裏面上 端貼り付け	Aタイプ	凸面：摩滅 凹面：不明	やや密。Φ1mm砂粒 微量含む。	軟質	淡橙	丸瓦先端無加工
1.0	0.2	接合式 瓦当裏面上 端貼り付け	Aタイプ	凸面：不明 凹面：不明	やや粗。Φ1mm砂粒 微量含む。	軟質	暗褐	
(1.2)	0.76	接合式 瓦当裏面上 端貼り付け	Aタイプ	凸面：タテナデ 凹面：布目	やや粗。Φ1mm砂粒 微量含む。	軟質	暗褐	丸瓦広端凹面浅 いヨコケズリ
1.35	0.14	接合式 瓦当裏面上 端貼り付け	Aタイプ	凸面：ヨコナデ 凹面：不明	やや粗。Φ2mm砂粒 少量含む。	軟質	灰黒	
1.7	0.08	接合式	不明	凸面：摩滅 凹面：摩滅	やや粗。Φ1mm砂粒 少量含む。	軟質	淡黄橙	

周縁幅 全長	重量 (kg)	瓦当成形法	額形態	調 整	胎 土	焼成	色調	備 考
	0.82	瓦当貼り付け	不明	凸面：不明 凹面：ヨコケズリ	やや粗。Φ1mm砂粒 少量含む。	やや 軟質	黒	
	0.42	瓦当貼り付け	曲線彎 II	凸面：タテケズリ 凹面：ヨコケズリ	やや密。Φ1mm砂粒 少量含む。	やや 軟質	暗褐	
0.7	1.52	瓦当貼り付け	曲線彎 II	凸面：タテケズリ 凹面：ヨコケズリ	やや密。Φ0.5mm砂 粒少量含む	やや 硬質	灰白	棒状圧痕あり。 平瓦にのみ黒色 粒子含む
	0.42	不明	不明	凸面：不明 凹面：布目・一部ナデ	やや密。Φ0.5mm砂 粒少量含む	やや 軟質	暗褐	棒状圧痕あり
0.5	0.32	不明	不明	凸面：不明 凹面：布目・一部ナデ	やや粗。Φ2mm砂粒 少量含む。	やや 軟質	黒	棒状圧痕あり

胎 土	焼成	色調	備 考
やや粗。Φ1~2 mm砂粒中量含む	やや 軟質	黒	脚部幅7.4cm 挟み込み半径5.7cm

凸面調整痕の特徴	凹面調整	胎 土	焼成	色調	備 考
縱長格子目 I	布目	やや粗。Φ3mm砂粒少量含む。	軟質	灰白	
縱長格子目 I	布目	やや粗。Φ3mm砂粒少量含む。	軟質	灰白	
偏斜格子目 V	布目・一部タテナデ	やや粗。Φ0.5mm砂粒極微量含む。	軟質	黒褐色	
偏斜格子目 VI	摩滅	やや粗。Φ3mm砂粒少量含む。	やや 軟質	黒褐色	
偏斜格子目 VI	布目	やや粗。Φ2mm砂粒少量含む。	やや 軟質	黒褐色	

*数値の空欄は欠失等により計測不能を示す。

丸瓦

報告 番号	出土 地区	出土 位置	型式 分類 名	法 量(cm)														
				全長	胴部 広端 外側 幅	胴部 広端 内側 幅	胴部 広端 外側 高	胴部 狭端 内側 高	胴部 狭端 外側 高	胴部 狭端 面幅	胴部 長	玉縁 部広 端外 側幅	玉縁 部狭 端外 側幅	玉縁 部広 端内 側幅	玉縁 部狭 端外 側高	玉縁 部狭 端内 側高		
20	C-1 2Tr	SX07	M1類						15.5	8.0	1.4		13.0	11.7	10.2	6.5	5.6	4.2
21	C-1 2Tr	SX07	M1類	41.7							1.3	35.1						
22	C-1 2Tr	SX07	M1類								1.2							
23	A-2 1Tr	SX01	M2類	37.0	15.0	12.6	7.2	6.3	14.5	8.0	1.6	30.0	11.1	(9.8)	(8.6)	6.3	5.1	4.0
24	A-2 1Tr	SX01	M2類						(13.5)	7.6	1.6		10.4	8.5	(7.0)	5.9	5.1	4.0
25	A-2 1Tr	SX01	M3類	36.4	14.7	13.5	7.5	6.6	14.1	7.1	1.1	30.7	12.0	(11.0)	(9.4)	5.5	5.0	3.9
26	A-2 1Tr	SX01	M4類						14.5	7.9	1.6		11.5	(10.0)	(7.6)	6.3	5.8	3.6
27	A-2 1Tr	SX01	M5類	36.1	14.0	12.3	7.8	6.3	15.3	7.2	1.1	28.5	12.6			6.1	4.2	3.8
28	A-2 1Tr	SX01	M6類							7.5	1.8					5.7	5.0	3.6
29	C-1 2Tr	P8	M7類						13.0	7.2	1.3		10.8	(8.9)	(6.5)	5.9	5.2	3.5
30	A-2 1Tr	SX01	MB類															
31	A-2 1Tr	SX01	不明					6.9	5.4									
32	C-1 2Tr	SX07	不明					8.35	6.8									
33	A-2 1Tr	SX01	不明		14.65	11.8	7.3	5.8										

玉縁 部長	くび れ部 玉縁 端長	くび れ部 広端 側高	くび れ部 狭端 側高	凹面 側玉 縁部 長	銅部 厚	重量 (kg)	調整	胎 土	焼 成	色 調	備考
										外=外面 断=断面	
6.0	9.0	5.3	4.5	6.7	2.2	1.84	凸面：摩滅により不明 凹面：未調整・布目残る	やや密。Φ1～2mm 砂粒少量含む。	軟質	外：灰黒 断：灰白	
6.6	9.3			6.7	2.2	1.36	凸面：摩滅により不明 凹面：未調整・布目残る	やや密。Φ1～2mm 砂粒少量含む。	軟質	外：黄灰 断：黄橙	
	8.9			6.3	2.3	0.64	凸面：摩滅により不明 凹面：未調整・布目残る	やや密。Φ1～2mm 砂粒少量含む。	軟質	外：灰白 断：灰白	
7.0	9.4	5.9	4.4	6.5	1.6	2.34	凸面：摩滅により不明 凹面：未調整・布目残る	やや粗。Φ1～2mm 砂粒少量含む。	軟質	外：淡褐 断：淡橙	
6.4	8.8	5.5	4.2	6.0	2.0	0.64	凸面：摩滅・欠失により不明 凹面：未調整・布目残る	やや粗。Φ1～2mm 砂粒少量含む。	軟質	外：淡褐 断：淡橙	
5.7	6.8	5.2	4.1	4.9	1.4	1.88	凸面：板状工具によるタテナデ 凹面：未調整・布目残る	やや密。Φ1mm砂粒 微量含む。	やや硬質	外：灰黒 断：灰	
5.5	8.8	5.4	4.4	5.5	1.8	1.12	凸面：板状工具によるナデ 凹面：未調整・布目残る	やや密。Φ1～2mm 砂粒少量含む。	やや硬質	外：黒 断：灰・黒	
7.2	9.1	5.6	3.8	6.7	1.6	1.70	凸面：板状工具によるナデ 凹面：未調整・布目残る	やや粗。Φ1～2mm 砂粒少量含む。	軟質	外：灰褐 断：淡褐	
4.8	6.4	4.95	4.1	3.4	1.8	0.9	凸面：摩滅・欠失により不明 凹面：未調整・布目残る	やや粗。Φ1mm砂粒 微量含む。	軟質	外：灰黒 断：淡橙	
4.7	7.5	5.6	3.9	3.8	1.9	0.53	凸面：板状工具によるヨコナデ 凹面：未調整・布目残る	密。Φ0.5mm砂粒を 極微量含む。	やや硬質	外：灰白 断：灰白	
6.6	8.2	(5.4)	(3.6)	3.5	2	0.38	凸面：板状工具によるヨコナデ 凹面：未調整・布目残る	やや粗。Φ1mm砂粒 少量含む。	軟質	外：暗褐 断：褐	
				1.8	0.51		凸面：板状工具によるヨコナデ 凹面：未調整・布目が残る	密。Φ1mm砂粒を微 量含む。	やや軟質	外：灰白 断：灰白	
				1.8	0.68		凸面：板状工具によるヨコナデ 凹面：未調整・布目・糸切り痕	やや粗。Φ1～2mm 砂粒少量含む。	軟質	外：灰白 断：灰白	
				1.7	0.75		凸面：板状工具によるヨコナデ 凹面：未調整・布目・糸切り痕	密。Φ1mm砂粒を微 量含む。	やや軟質	外：灰白 断：灰白	

※数値の空欄は欠失等により計測不能を示す。

()は推定値を表す。

平瓦

報告番号	出土地区	出土位置	型式分類	法量(cm)				重量(kg)	凸面調整技法
				全長	狭端部幅	広端部幅	厚さ		
34	C-1 2Tr	SX07	H 1類				2.4	1.4	板状工具によるタテナデ(ハケメ)
35	C-1 2Tr	SX07	H 1類				2.35	1.0	板状工具によるタテナデ(ハケメ)
36	4tr	表土	H 1類				2.2	0.5	板状工具によるタテナデ(ハケメ)
37	A-2 1Tr	SX01	H 2類				2.3	0.08	タタキ板による縦位タタキ
38	A-2 1Tr	SX01	H 3類			21.9	2.2	1.4	タタキ板による縦位タタキ
39	A-2 1Tr	SX01	H 3類				2.2	0.72	タタキ板による縦位タタキ
40	A-2 1Tr	SX01	H 3類				2.0	0.3	タタキ板による縦位タタキ
41	A-2 1Tr	SX01	H 3類				2.2	0.45	タタキ板による縦位タタキ
42	C-1 2Tr	SX02	H 3類				2.0	0.68	タタキ板による縦位タタキ
43	A-2 1Tr	SX01	H 3類				2.2	0.52	タタキ板による縦位タタキ
44	4tr	包含層	H 4類				2.0	0.25	タタキ板による縦位タタキ
45	C-1 3Tr	SX08	H 5類				2.3	1.82	タタキ板による縦位タタキ後一部ヨコナデ
46	C-1 2Tr	SX02	H 5類	38.7	27.3	30.4	2.0	4.18	タタキ板による縦位タタキ後一部ヨコナデ
47	C-1 2Tr	SX07	H 5類	38.0			2.2	2.93	タタキ板による縦位タタキ
48	C-1 2Tr	SX02	H 5類	38.6			2.0	2.38	タタキ板による縦位タタキ後一部ヨコナデ
49	C-1 2Tr	SX07	H 5類				2.0	1.22	タタキ板による縦位タタキ後一部ヨコナデ
50	C-1 2Tr	SX07	H 5類				2.1	0.66	タタキ板による縦位タタキ後一部ヨコナデ
51	C-1 2Tr	SX07	H 5類				1.8	0.62	タタキ板による縦位タタキ
52	C-1 2T	SX07	H 5類				2.0	0.68	タタキ板による縦位タタキ後一部ヨコナデ
53	C-1 2Tr	SX07	H 5類				1.7	0.35	タタキ板による縦位タタキ後一部ヨコナデ
54	A-2 1Tr	SX01	H 5類				2.0	0.82	タタキ板による縦位タタキ後一部ヨコナデ
55	C-1 2Tr	SX07	H 5類				2.0	0.56	タタキ板による縦位タタキ
56	C-1 2T	SX07	H 5類				2.0	0.44	タタキ板による縦位タタキ
57	C-1 2T	SX07	H 5類				2.2	0.6	タタキ板による縦位タタキ
58	A-2 1Tr	SX01	H 5類				2.2	0.76	タタキ板による縦位タタキ
59	A-2 1Tr	SX01	H 6類			25.3	2.0	1.74	タタキ板による縦位タタキ後一部タテ・ヨコナデ
60	A-2 1Tr	SX01	H 6類				2.4	0.84	タタキ板による縦位タタキ
61	4tr	包含層	H 7類				1.7	0.84	タタキ板による縦位タタキ
62	C-1 2Tr	SX07	H 7類				1.8	0.46	タタキ板による縦位タタキ
63	C-1 2Tr	SX07	H 7類				2.1	0.46	タタキ板による縦位タタキ
64	A-2 包含層	SX01	H 8類				2.0	0.5	タタキ板による縦位タタキ後一部タテナデ
65	A-2 1Tr	SX01	H 8類				2.1	0.38	タタキ板による縦位タタキ
66	A-2 1Tr	SX01	H 9類				1.8	0.25	タタキ板による縦位タタキ
67	A-2 1Tr	SX01	H 10類	35.3			1.8	1.91	タタキ板による縦位タタキ
68	A-2 1Tr	SX01	H 11類				2.0	0.28	タタキ板による縦位タタキ

凸面調整痕の特徴	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
縦平行条線	布目・一部タテナデ	やや密。Φ1~2mm砂粒微量含む。	やや軟質	灰白	
縦平行条線	布目・一部タテナデ	やや粗。Φ1~2mm砂粒少量含む。	硬質	灰白	
縦平行条線	布目	やや粗。Φ1~2mm砂粒微量含む。	やや軟質	淡黄灰	
正格子目Ⅰ	布目・一部タテナデ	やや密。Φ1~2mm砂粒極微量含む。	やや軟質	灰白	
縦長格子目Ⅰ	工具タテナデ・布目一部残る。	密。Φ1~2mm砂粒少量含む。	硬質	灰	
縦長格子目Ⅰ	摩滅・一部布目残る	やや密。Φ1~2mm砂粒少量含む。	軟質	淡黃	
縦長格子目Ⅰ	布目	密。Φ1mm砂粒微量含む。	硬質	灰	
縦長格子目Ⅰ	布目・一部タテナデ	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	やや軟質	灰白	
縦長格子目Ⅰ	摩滅・一部布目残る	やや密。Φ1~2mm砂粒少量含む。	軟質	灰白	
縦長格子目Ⅰ	摩滅・一部布目残る	やや密。Φ1~3mm砂粒少量含む。	軟質	灰白	
縦長格子目Ⅱ	摩滅	やや密。Φ1~3mm砂粒少量含む。	やや軟質	黄褐	
方形斜格子目Ⅰ	摩滅・一部布目残る	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	軟質	灰白	
方形斜格子目Ⅰ	布目・一部タテナデ	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	やや軟質	灰白	
方形斜格子目Ⅰ	布目・一部タテナデ	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	硬質	灰	
方形斜格子目Ⅰ	摩滅・一部布目残る	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	軟質	灰白	
方形斜格子目Ⅰ	布目	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	やや軟質	灰白	
方形斜格子目Ⅰ	布目・一部タテナデ	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	やや硬質	灰白	
方形斜格子目Ⅰ	布目	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	硬質	灰	
方形斜格子目Ⅰ	布目・一部タテナデ	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	やや硬質	灰白	
方形斜格子目Ⅰ	布目	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	やや軟質	灰白	
方形斜格子目Ⅰ	工具タテナデ・布目消す	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	硬質	灰	
方形斜格子目Ⅰ	布目	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	硬質	灰	
方形斜格子目Ⅰ	布目・一部ナデ	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	硬質	灰	
方形斜格子目Ⅰ	布目	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	硬質	灰	
方形斜格子目Ⅰ	布目	やや密。Φ0.5mm砂粒少量含む。	硬質	灰	
方形斜格子目Ⅰ	布目	やや密。Φ0.5mm砂粒微量含む。	硬質	灰	
方形斜格子目Ⅱ	工具タテナデ・一部布目残る。	密。Φ1mm砂粒微量含む。	硬質	灰	
方形斜格子目Ⅱ	摩滅	やや密。Φ1mm砂粒微量含む。	やや軟質	灰白	
偏斜格子目Ⅰ	摩滅	やや密。Φ1mm砂粒微量含む。	軟質	灰白	
偏斜格子目Ⅰ	布目	やや密。Φ1mm砂粒微量含む。	軟質	灰白	
偏斜格子目Ⅰ	布目・一部ヨコケズリ	やや密。Φ1mm砂粒微量含む。	やや軟質	灰白	
偏斜格子目Ⅱ	布目・一部タテナデ	やや密。Φ1mm砂粒微量含む。	やや軟質	灰白	
偏斜格子目Ⅱ	布目・一部タテナデ	やや密。Φ1mm砂粒微量含む。	やや軟質	灰白	
偏斜格子目Ⅲ	布目・一部タテナデ	やや密。Φ1mm砂粒微量含む。	やや硬質	灰白	
偏斜格子目Ⅳ	布目・一部タテナデ	やや粗。Φ2mm砂粒微量含む。	やや軟質	黄灰	
偏斜格子目Ⅴ	布目・一部タテナデ	やや粗。Φ1mm砂粒微量含む。	やや軟質	黒褐	

※数値の空欄は欠失等により計測不能を示す。

報告番号	出土地区	出土位置	型式分類	法 量 (cm)				重量 (kg)	凸面調整技法
				全長	狹端部幅	広端部幅	厚さ		
69	A-2 1Tr	SX01	H12類				1.8	0.88	タタキ板による縦位タタキ
70	A-2 1Tr	SX01	H12類				2.25	1.30	タタキ板による縦位タタキ
71	A-2 1Tr	SX01	H12類			27.0	1.8	2.43	タタキ板による縦位タタキ
72	C-1 2Tr	SX06	H13類				2.2	0.36	タタキ板による縦位タタキ
73	C-1 2Tr	SX07	H14類				2.4	0.35	タタキ板による縦位タタキ
74	C-1 2Tr	SX02	H15類	36.5	23.0	26.5	1.8	3.48	タタキ板による縦位タタキ
75	A-2 1Tr	SX01	H15類				2.2	0.66	タタキ板による縦位タタキ
76	A-2 1Tr	SX01	H15類				2.0	0.88	タタキ板による縦位タタキ
77	A-2 1Tr	SX01	H15類				2.3	0.6	タタキ板による縦位タタキ
78	C-1 2Tr	SX07	H15類				2.3	0.78	タタキ板による縦位タタキ
79	A-2 1Tr	SX01	H15類				2.0	1.12	タタキ板による縦位タタキ
80	A-2 1Tr	SX01	H16類				1.6	0.32	タタキ板による縦位タタキ
81	A-2 1Tr	SX01	H16類				1.9	0.56	タタキ板による縦位タタキ
82	A-2 1Tr	SX01	H16類				1.9	0.27	タタキ板による縦位タタキ
83	A-2 1Tr	SX01	H17類			25.5	2.4	2.38	タタキ板による縦位タタキ
84	C-1 2Tr	SX07	H18類	26.7			2.4	1.62	タタキ板による縦位タタキ
85	C-1 2Tr	包含層	H18類				1.8	0.32	タタキ板による縦位タタキ
86	C-1 2Tr	SX07	H18類				2.0	0.58	タタキ板による縦位タタキ
87	D-1	表土	H19類				2.2	0.28	綱を縦方向に巻きつけたタタキ板による縦位タタキ
88	5tr	包含層	H19類				1.7	0.1	綱を縦方向に巻きつけたタタキ板による縦位タタキ
89	4tr	盛土	H20類				2.2	0.1	綱を縦方向に巻きつけたタタキ板による縦位タタキ
90	A-2 1Tr	SX01	H20類				2.0	0.12	綱を縦方向に巻きつけたタタキ板による縦位タタキ
91	4tr	包含層	H20類				2.7	0.12	綱を縦方向に巻きつけたタタキ板による縦位タタキ
92	A-2 1Tr	SX01	H21類				1.8	0.7	タタキ板による縦位タタキ後ナデ消し
93	C-1 2Tr	SX07	H21類				3.0	0.55	タタキ板による縦位タタキ後ナデ消し
94	A-2 1Tr	SX01	H21類				2.2	1.97	タタキ板による縦位タタキ後ナデ消し
95	C-1 2Tr	SX07	H21類				2.4	0.92	タタキ板による縦位タタキ後ナデ消し
96	A-2 1Tr	SX01	H21類				2.3	0.34	タタキ板による縦位タタキ後ナデ消し
97	C-1 2Tr	SX07	H21類				2.2	0.24	タタキ板による縦位タタキ後ナデ消し
98	C-1 2Tr	SX07	H21類				1.3	0.38	タタキ板による縦位タタキ後ナデ消し
105	A-2 1Tr	SX01	H 6類				2.0	0.63	タタキ板による縦位タタキ
106	C-1 2Tr	SX07	H 7類				1.8	0.57	タタキ板による縦位タタキ
107	4tr	包含層	H10類				1.8	0.29	タタキ板による縦位タタキ
108	C-1 2Tr	SX07	H13類				2.2	0.45	タタキ板による縦位タタキ
109	C-1 2Tr	SX07	H18類				1.7	0.82	タタキ板による縦位タタキ

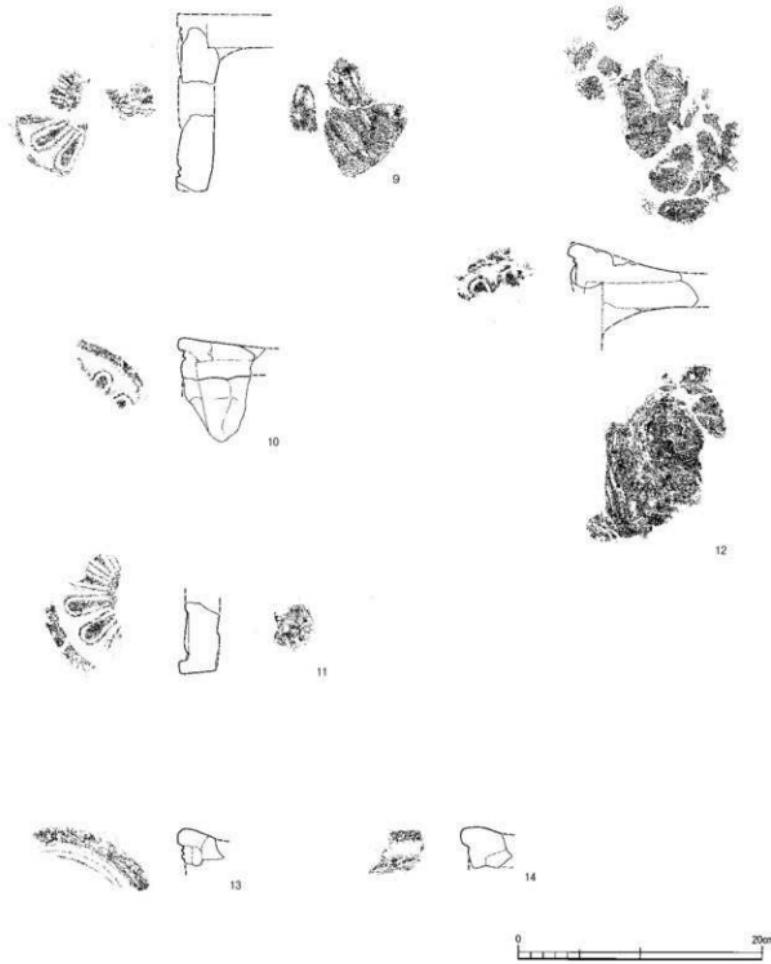
凸面調整痕の特徴	凹面調整	胎土	焼成	色調	備考
偏斜格子目VI	タテナデ	やや密。Φ 1mm砂粒微量含む。	やや軟質	黒褐	
偏斜格子目VI	布目	やや密。Φ 1mm砂粒微量含む。	やや軟質	黒褐	
偏斜格子目VI	布目・一部タテナデ	やや密。Φ 1mm砂粒微量含む。	やや軟質	暗灰	
縱長斜格子目I	タテナデ・一部布目	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	やや軟質	灰白	
縱長斜格子目II	摩滅	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	やや軟質	灰白	
横長斜格子目I	布目・一部タテナデ	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	硬質	灰	
横長斜格子目I	布目・一部タテナデ	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	硬質	灰	
横長斜格子目I	布目	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	やや硬質	灰白	
横長斜格子目I	布目	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	硬質	灰	
横長斜格子目I	布目	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	軟質	灰白	
横長斜格子目I	布目	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	やや硬質	灰白	
横長斜格子目II	摩滅	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	軟質	灰黃	
横長斜格子目II	布目・一部工具タテナデ	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	やや軟質	灰白	
横長斜格子目II	布目・タテナデ	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	硬質	灰	
特殊I	布目	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	硬質	灰白	
素文	布目	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	やや軟質	灰黃	
素文	布目	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	硬質	灰	
素文	布目	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	軟質	灰白	
網目I	布目	やや粗。Φ 1mm砂粒少量含む。	軟質	浅黄	
網目I	布目	やや粗。Φ 1mm砂粒少量含む。	硬質	灰白	
網目II	布目・一部タテナデ	やや粗。Φ 1～2mm砂粒少量含む。	軟質	灰黑	
網目II	布目	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	やや軟質	灰黑	
網目II	布目	やや粗。Φ 1mm砂粒少量含む。	やや軟質	灰白	
不明タキメのちナデ	布目・一部タテナデ	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	硬質	灰	
不明タキメのちナデ	布目・一部タテナデ	やや密。Φ 1mm砂粒少量含む。	やや硬質	灰白	
不明タキメのちナデ	布目・一部タテナデ	やや粗。Φ 1～2mm砂粒少量含む。	軟質	褐灰	
不明タキメのちナデ	タテナデ	やや密。Φ 1mm砂粒少量含む。	軟質	暗褐	
不明タキメのちナデ	布目	密。Φ 1mm砂粒少量含む。	やや軟質	灰白	
不明タキメのちナデ	布目・一部タテナデ	密。Φ 1mm砂粒少量含む。	やや硬質	灰白	
不明タキメのちナデ	布目・一部タテナデ	密。Φ 1mm砂粒少量含む。	やや硬質	灰白	
方形斜格子目II	布目・一部タテナデ	やや粗。Φ 1mm砂粒少量含む。	やや硬質	灰白	拓本・写真のみ
偏斜格子目I	布目	やや密。Φ 1mm砂粒少量含む。	軟質	黄灰	拓本・写真のみ
偏斜格子目IV	布目・一部タテナデ	やや密。Φ 1mm砂粒微量含む。	硬質	灰	拓本・写真のみ
縱長斜格子目I	摩滅	やや密。Φ 0.5mm砂粒微量含む。	やや軟質	灰白	拓本・写真のみ
素文	布目	やや密。Φ 1mm砂粒微量含む。	軟質	灰白	拓本・写真のみ

* 数値の空欄は欠失等により計測不能を示す。

付表6 土器一覧表

報告番号	トレンチ	出土場所		種別	器種	法量(cm)			形態・手法	胎土	焼成	色調
		通横	層位			口径	器高	底径				
1	1トレンチ	SX01 サブトレ2	上層 (焼土面上)	須恵器	杯B	11.8	4.5	8.4	高台外面再調整。回転ヘラキリ不調整	細繩目を多く含む	やや不良	5Y7/1灰白
2	2トレンチ	西端	包含層	須恵器	杯B	(3.7)	10.5		外面回転ケズリ	細かい砂粒含む	良	2.5Y8/灰白
3	3トレンチ	SK09		須恵器	蓋	12.6	(3.0)		外面回転ケズリ、自然輪	細かい砂粒含む	良	N7/0灰白
4	1トレンチ	SX01 サブトレ3	下層	須恵器	広口壺	18.0	(8.6)		回転ナデ 脊部と肩部に2条の沈線	砂粒を少量含む	良	N7/0灰白
5	1トレンチ	SX01 サブトレ1	下層	須恵器	突帯	長5.5幅1.6厚1.15			裏面と片側の裏面に剥離痕跡	密	良	N4.0灰
6	1トレンチ	SX01 サブトレ2	下層	須恵器	壺	17.0	(3.15)		回転ナデ？ 全面に自然輪	細繩目を多く含む	良	5Y6/2灰オリーブ
7	2トレンチ	SK04		須恵器	壺	19.4	(4.15)		回転ナデ	細繩目を多く含む	良	N7/0灰白
8	3トレンチ		包含層	須恵器	壺	21.0	(9.3)		外面平行タキナカキメ 内面同心円タタキ	2mm以下の砂粒含む	良	N5.0灰白

図版1 出土遺物（瓦1）



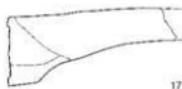
図版2 出土遺物（瓦2）



15



17



16



18

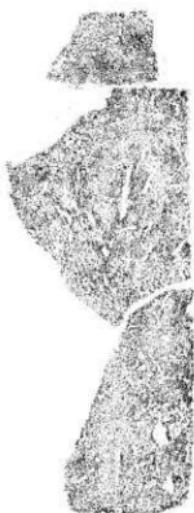
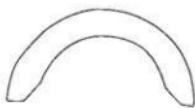


19

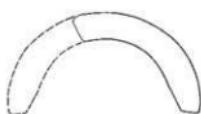




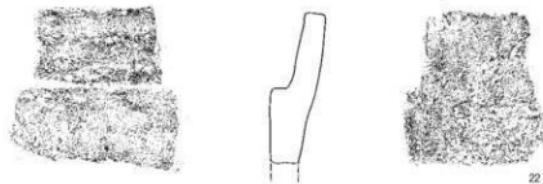
20



21



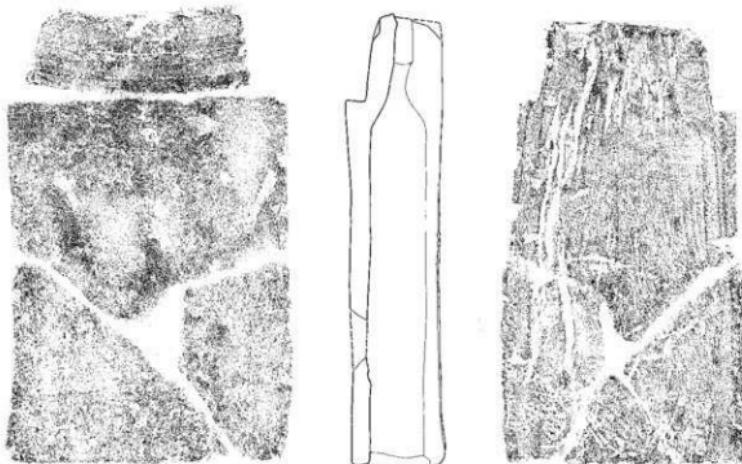
図版4 出土遺物（瓦4）



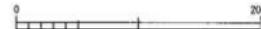
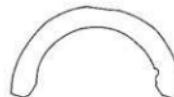
22

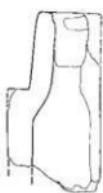
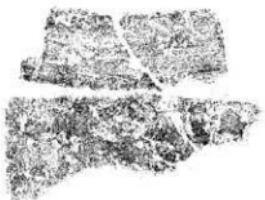


23

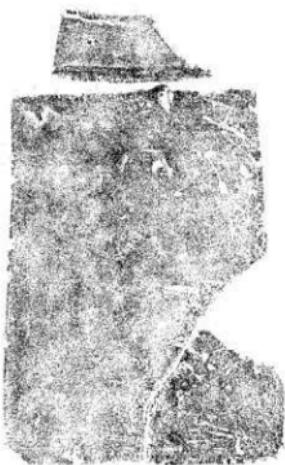


23





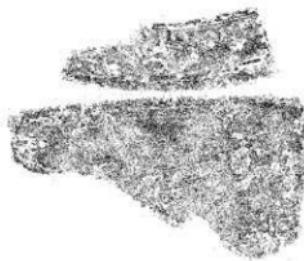
24



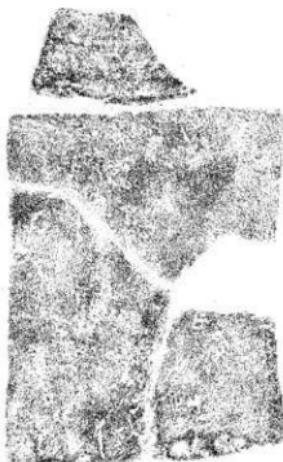
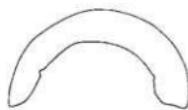
25



図版6 出土遺物（瓦6）



26



27

